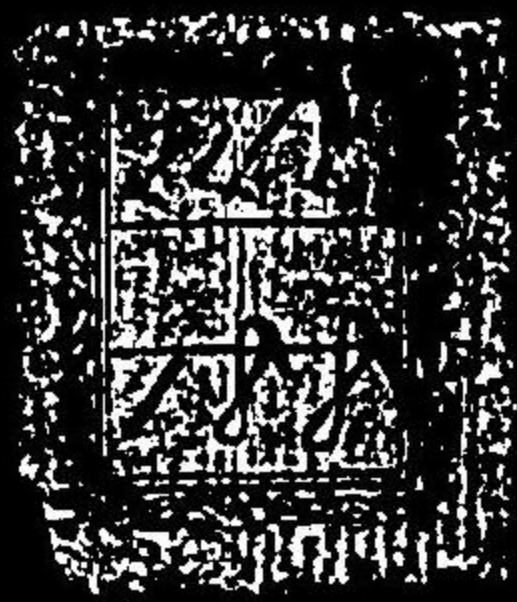


日本文学史要
全



084967-000-5

246-188

日本文学史要

佐藤 正範/著

M43

DBB-0356



文學博士芳賀矢一閱

佐藤正範著

日本文學史要

明治

43. 5. 14

丙交

東京 光風館藏版

凡例

一、本書は、中學校、師範學校、高等女學校、及び同程度の學校等に於いて、國文學史の大要を授くる教科用書として、編纂したるものなり。

一、本書は、從來の經驗に鑒み、生徒の學力と、教授の時間數とを參酌し、主として簡明に敘述せむことを期したり。

一、國文學史を授くるには、先づその時代の思想を説くこと肝要なり。又漢文學及び佛教は、古來我が國民の思想と國文學とに、至大なる影響を及したりしを以て、本書は、各時代毎に、此等に關する梗概を敘したり。

一、本書に挿入したる作例は、適切にして、人口に膾炙せるものを選択し、又國語講讀書中にあるものをば、省略したるあり。

一、本書上欄に、注意を要すべき諸種の事項を挙げたり。教授時間數を酌量し、適宜参照せられむことを要す。

明治四十三年三月

著者識す

目次

第一篇 序論

- 一、文學の意義……………二、文學の大別……………一頁
- 三、國文學の特質……………四、國文學史の要務……………二
- 五、我が國各時代文學の一斑 概括……………三

第二篇 本論

第一期 上古の文學

- 第一章 通論 一、起原 二、思想 三、文字 四、作品……………八
- 第二章 各論 一、韻文 二、散文 三、漢文學及び佛敎……………九
- 第三章 結論 一、系統 二、概括……………三

第二期 奈良朝の文學

- 第一章 通論 一、發達 二、思想 三、文字 四、作品……………四
- 第二章 各論 一、韻文 二、散文 三、漢文學及び佛敎……………五
- 第三章 結論 一、系統 二、概括……………三

第三期 平安朝の文學

第一章 通論 一、發達 二、思想 三、文字 四、作品……………三
 第二章 各論 一、散文 二、韻文 三、漢文學及び佛教……………五
 第三章 結論 一、系統 二、概括……………九

第四期 鎌倉時代及び南北朝の文學

第一章 通論 一、變遷 二、思想 三、文字 四、作品……………四
 第二章 各論 一、散文 二、韻文 三、漢文學及び佛教……………四
 第三章 結論 一、系統 二、概括……………五

第五期 室町時代の文學

第一章 通論 一、變遷 二、思想 三、文字 四、作品……………五
 第二章 各論 一、散文 二、韻文 三、漢文學及び佛教……………五
 第三章 結論 一、系統 二、概括……………六

第六期 江戸時代の文學

第一章 通論 一、發達 二、思想 三、文字 四、作品……………六
 第二章 各論 一、散文 二、韻文 三、漢文學及び佛教……………六

第七期 現代の文學

第一章 通論 一、發達 二、思想 三、文字 四、作品……………六
 第二章 各論 一、散文 二、韻文 三、漢文學……………七
 第三章 結論 一、系統 二、概括……………九

附錄

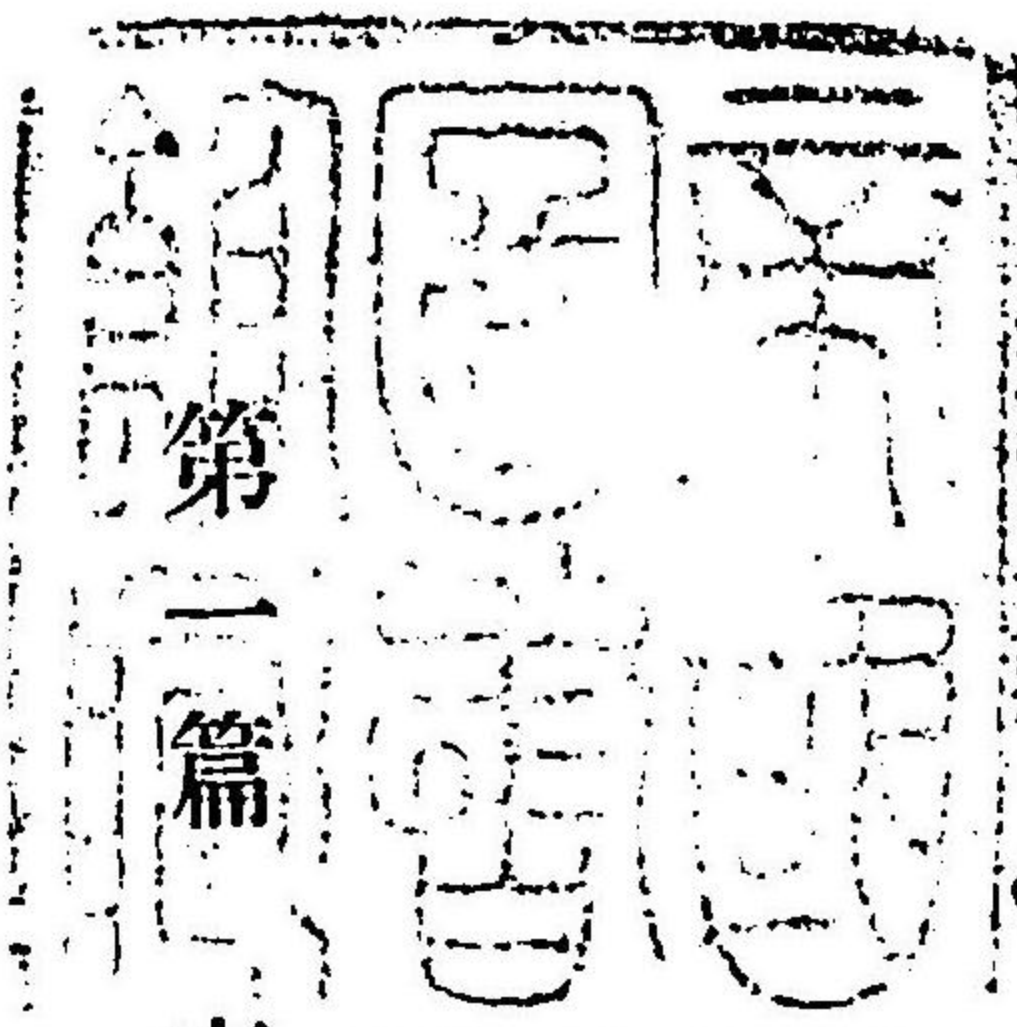
年表……………一

目次終

日本文學史要

文學博士 芳賀矢一 閱

佐藤正範 著



第一篇 序論

第一章 文學の意義

人の思想感情を言語文章によりて、美術的に敘述したるものを文學といふ。

第二章 文學の大別

文學の種類は多けれども、韻文及び散文の二部に大別する

序論

文學。

韻文又律語といふ。

散文。

を得べし。韻文は、詩歌等の如く、一定の形式に基きて、語句を配置せるものをいひ、散文は、即ち文章にして、適宜に語句を連続せるものをいふ。

第三章 國文學の特質

思想と文學との關係。
國風の文學。

一個人及び一國民には、固有の思想感情あり。文學は、その特質を發揮す。我が國民は、古來、天壤無窮の皇室を戴き、山川秀麗の地に住み、忠孝の念に篤く、自然の美を愛し、外國より輸入せる文物をも自國化したして、特有の思想感情を包容せる我が國風の文學を大成せり。これ即ち國文學なり。

第四章 國文學史の要務

國文學史の要件。

國文學史は、國文學の沿革、及び顯著なる作品、作者、要件等を説く。即ち國文學の起原、發達、變遷の歴史を學び、兼ねて我が國民思想の特質等を知るは、國文學史の要務なりとす。

第五章 我が國各時代文學の一斑

第一期 上古の文學

神代より元明天皇、奈良奠都の頃までの文學を上古の文學となす。この時代は、韻文として歌謠あり、散文として祝詞等あり。共に思想醇樸にして、外國思想の感化を蒙らず。

第二期 奈良朝の文學

奈良奠都の頃より、光仁天皇の終の頃まで、七十餘年間の文學を奈良朝の文學となす。當期、韻文は、長歌及び短歌發達し、

奈良奠都は、和銅三年、紀元一三七〇年なり。

光仁天皇の終は、天應元年、紀元一四四一年なり。

散文は、宣命等あり。思想、猶上古樸實の風を失はざる中にも、漢文學及び佛教の影響漸く現れたり。

第三期 平安朝の文學

桓武天皇の初及び平安奠都の頃より、後鳥羽天皇の朝、鎌倉幕府創立の頃まで、四百十餘年間の文學を平安朝の文學となす。片假名及び平假名行はれてより、物語、隨筆等の散文大に發達し、韻文は、短歌進歩して異彩を放ち、孰れも優雅艶麗なれども、思想の纖弱を免れず。次期に近づくに従ひ、漸次、勇武の氣象を帯びたり。

第四期 鎌倉時代及び南北朝の文學

鎌倉幕府創立の頃より、後小松天皇の朝、南北朝合一の頃まで、凡二百年間の文學を鎌倉時代及び南北朝の文學となす。

鎌倉幕府創立は、建久三年、紀元一八五二年なり。

南北朝合一は、明德三年、紀元二〇五二年なり。

戰記、隨筆等の文ありて、多く漢語、佛語を混用し、韻文漸く衰運に趨きたり。勇壯なる思想に、悲哀の加りたるものありて、厭世的の文學をも見るに至りぬ。

第五期 室町時代の文學

南北朝合一の頃より、後陽成天皇の朝、江戸幕府創立の頃まで、二百十餘年間の文學を室町時代の文學となす。當期に至りては、謠曲、狂言記等の文出で、從來の和歌、益、衰微して、連歌の流行となりぬ。思想、猶概して幽鬱に沈めり。

第六期 江戸時代の文學

江戸幕府創立の頃より、大政奉還の頃まで、二百六十餘年間の文學を江戸時代の文學となす。この時代は、國民總べての社會階級より文學勃興し、和漢調和文、雅文を始として、戯曲

江戸幕府創立は、慶長八年、紀元二二六三年なり。

大政奉還は、慶應三年、紀元二五二七年なり。

小説の文に至るまで、各種の散文簇生し、特に新調の短歌と俳諧とは、一世を風靡せり。厭世的の思想漸く脱して、儒教主義、國家主義の活動を見るに至れり。

第七期 現代の文學

王政維新後は、從來の國文學と西洋文學との調和により、各種の文學著しく發達し、翻譯文あり、普通文あり、戯曲小説の文あり、新體詩も亦創作せられ、思想の豊富、前古に比なく、世界文學の長所を鍾めて、益、進歩發展の趨勢にあり。

王政維新は、紀元二五二八年なり。

概 括

一、文學の意義。

二、文學の大別。

三、國文學の特質。

四、國文學史の要務。

五、我が國各時代文學の一斑。

一、上古の文學「歌謠、祝詞等。

二、奈良朝の文學「長歌、短歌、宣命等。

三、平安朝の文學「物語、隨筆、短歌等。

四、鎌倉時代及び南北朝の文學「戦記文、隨筆、和漢調、短歌等。

五、室町時代の文學「謡曲、狂言記、連歌等。

六、江戸時代の文學「和漢調、戯曲、小説、俳諧、短歌、狂言記等。

七、現代の文學「各種散文、短歌、新體詩等。

第三編 本論

第一期 上古の文學

第一章 通論

神代より紀元一三七〇年、元明天皇、奈良京都の頃までの文學を上古の文學となす。

一、起原 當期は、草昧の世として、文化猶未だ發達せざれば、文學と稱すべきもの、實に寥々たれども、歌謠、傳説、祝詞の類は、夙に存して、口より口に傳へられ、後人の筆に録せられたるものあり。これ即ち我が國文學の起原なり。

二、思想 當時、我が國民は、風氣醇樸にして、祖宗を尊び、神明を敬ひ、忠孝の念隨つて篤く、天然の美を愛し、清潔を好めり。儒佛二教、傳來の後も、甚だしき感化を受けざりき。

醇樸の性質。

國文學の口傳。

漢字の使用
和字の製作

三、文字 我が國、太古は、固有の文字なかりしが如し。漢文學渡來の後、その文字を借りて、國語を記せり。天武天皇の朝に、境部連石積イサヒをして、新字を作らしめられしことあり。

四、作品 以上の思想文字の發露する所、歌謠、祝詞等の作品となりて、後世に傳れり。左にこれを略述せむ。

第二章 各論

第一節 韻文

國文學の舊篇。

歌謠 我が國文學の舊篇として、現今に遺れるは、須佐之男命、神武天皇、日本武尊、仁德天皇、雄略天皇等を始とし、その他、后妃、皇子等の作り給へる歌謠なりとす。

一、思想 天真爛漫、修飾の迹なく、露骨にその感情を表せり。

三、歌體 五七音の調多けれども、三四六音など諷誦の便に従ひ、枕詞を冠らせ、對句を列し、疊句を用ゐたり。

須佐之男命、須賀の宮を造り給ひし時の御歌

八雲立つ、いづも八重垣、つまごみに、八重垣つくる、その八重垣を。

神武天皇、兄磯城、弟磯城を討ち給ひし時の御歌

楯竝めて、伊那佐の山の、木の間よも、い行き守らひ、たゝかへば、われはや飢ぬ、鳥つ鳥、鶺鴒が伴、いま助に來ね。

第二節 散文

祝詞 祝詞は、當時の國民が、祭祀を重んじて、神前に奏聞せし散文なり。祈年祭、大祓、大殿祭の詞などこれなり。

一、思想 神祇の威徳を稱揚し、神意を慰め奉らむことを勉め、莊重嚴肅にして雄渾の風あり。

二、文體 對句及び疊句を列ね、句節整齊、語路流暢にして、殆

鳥つ鳥は、鶺鴒の枕詞、古より船を使ひて、魚を捕りしことありしなり。

ど韻文に近し。

大祓の詞の一節

天の下、四方の國には、罪といふ罪はあらじと、科戸の風の、天の八重雲を、吹き放つ事の如く、朝の御霧、夕の御霧を、朝風夕風の吹き掃ふ事の如く、大津邊に居る大船を、舳解き放ち、船解き放ちて、大海の原に、押し放つ事の如く、彼方の繁木が本を、焼録の敏録もちて、打ち掃ふ事の如く、遣る罪はあらじと、祓ひ給ひ、清め給ふ事を、(中略)諸聞しめせと宣る。

第三節 漢文學及び佛教

一、漢文學の渡來 應神天皇の十五年、百濟の王子阿直岐、來朝し、翌年(紀元九四五年)、同國の博士王仁、來朝して、論語及び千字文を獻じてより、漢文學我が國に入り、菟道稚郎子この二人を師として漢籍を學び給ひぬ。以後、阿直岐、王仁の子孫は、東西の史部として、世々文筆の業に従へり。漢文學これよ

大祓の詞は、毎年六月十二月の末日、諸の罪穢を祓ひ清めむがために、神前に奏聞するなり。

漢籍の貢獻。

漢文の學習。

漢土文物の輸入。

り行はれたれども、當時の進歩は、甚だ遅々たりき。推古天皇の朝より、留學生を隋唐に派遣して、次第に漢土の文物を輸入し、孝徳天皇の朝には、遂に大化の新政を見るに至れり。

佛書の貢獻。

佛敎の勃起。

二、佛敎の傳來 欽明天皇の十三年(紀元一二一二年)、百濟の使者來朝し、佛像、經論等を獻じて、佛敎を傳へたり。蘇我稻目その子馬子等先づこれを信じ、推古天皇の朝、聖徳太子、萬機を總裁して、力をその普及に盡してより、佛敎俄に起りたれども、文學には未だ著しき影響を及さざるが如し。

第三章 結論

當期に於ける歌謠及び祝詞は、實に我が國文學の端緒なり。後世諸種の韻文竝に散文は、皆これより出でて發達せり。故

國文學の端緒。

に我が國文學及び我が民族固有の特質は、この時代の文學によりて、認知し得べきものあり。

概括

韻文—歌謠。 散文—祝詞。 漢文學—渡來。 佛敎—傳來。

當期、大化新政の際、國博士を置き、教育の事を掌らしめられ、天智天皇の朝、學校を創立し、文武天皇の朝、京都に大學、諸國に國學を置かれたり。

紀元一三七〇年、元明天皇、奈良朝都の頃より、紀元一四四一年、光仁天皇の終の頃までの文學を奈良朝の文學となす。

國文學の進歩

儒佛思想の混入。

第二期 奈良朝の文學

第一章 通論

一、發達 前期、大化新政の後、文物、制度等その面目を改めしが、當期に至り、國家の秩序整ひ、人智の進むに隨ひ、國文學の氣運も亦發揚し、その思想及び發表の形式とも、著しき進歩をなし、中にも韻文發達して、範を後世に垂れたり。

二、思想 當期は、文化漸く進みたれども、我が國民固有の性質は、猶前期の如く保持せられて、樸實渾厚なり。されども、漢文學の研究、佛教の信仰盛にして、自ら兩思想を混入せり。

三、文字 漢文學の行はるゝと共に、漢字を借りて國語を寫すことも案出せられ、許己呂心、保登等、藝斯郭公、天地、丈夫な

國語の記載法。假名の創作。

どと記載せり。されども、これ亦點畫複雜にして、漸く不便を感じ、遂に假名の創作あり。

四、作品 以上の思想文字の發露する所、長歌、短歌、史傳、宣命等の作品となりて、後世に傳れり。左にこれを略述せむ。

第二章 各論

第一節 韻文

長歌、短歌の進歩 當期の文學中、著しき發達をなしたるは、長歌及び短歌なり。當時の歌人が、山水の秀麗を愛し、人生の苦樂を謠へる歌調は、萬葉集に存して、千古に卓越せり。

萬葉集 本書には、長歌、短歌、旋頭歌マユカの類を載せたり。

一、撰者 詳ならず。或は孝謙天皇の頃、橘諸兄、撰集し、桓武

萬葉集二十卷、歌數四千四百九十六首あり。

天皇の頃、大伴家持、増補せるものならむかといへり。

柿本人麿。

三、歌人 本集の歌人中最も秀でたるは、柿本人麿及び山

山部赤人。

部赤人とす。人麿は、持統、文武の兩朝に仕へ、詞藻豊富にして、

山上憶良。

長篇を善くし、雄渾壯大の風あり、歴史、人事を詠ぜるもの多

大伴家持。

し。赤人は、聖武の朝に仕へ、簡潔謹嚴にして、短篇を善くし、温

雅の姿あり、自然の景を詠ぜるもの多し。この二人に亞ぐを
山上憶良及び大伴家持とす。憶良は、文武、元明、元正、聖武の四
朝に仕へ、熱情に富み、多く人倫の關係等を詠ぜり。家持は、元
正、聖武の兩朝に仕へ、歌題を取ること廣く、中にも慷慨義烈、
忠君愛國の情の盛なるものあり。而して憶良、家持の歌には、
漢文學、佛教の思想を混入せるもの多し。又作者の知れざる
ものにも、名歌少からず。

歌體の確定。

三、歌體及び特色 枕詞を置き、對句を設け、長歌、短歌、旋頭
歌の形式も、この頃より確定せり。讀み來れば、性情流露、意趣
奔放、雄大、率直にして、浮華の嫌なく、歴史上の疑問を解き、當
時の世態、人情、風俗等の一斑を知り得べきものあり。

乃(乃)能(能)而(而)
可(可)者(者)流(流)
等は、萬葉集の歌
を記すに用ゐたる
文字なれば、萬葉
假名の稱あり。

近江の荒れたる都の長歌竝に反歌

柿本人麿

王禰、畝火の山の、樞原の、ひじりの御世ゆ、生れまし、神のことく、櫻の木
の、いやつぎく、に、天の下、知しめし、を、空に見つ、大和をおきて、青丹よし、
奈良山を越え、いかさまに、思ほしめせか、天離る、鄙にはあれど、石走の、近江
の國の、さゝ浪の、大津の宮に、天の下、知しめし、けむ、天皇の、神の尊の、大宮は、
此處と聞けども、大殿は、こゝと言へども、春草の、茂く生ひたる、霞たつ、春日
の霧れる、百磯城の、大宮處、見れば悲しも。
さゝなみの、思賀の、辛崎、ささくあれど、大宮人の、ふね待ち、兼ねつ。
さゝなみの、志我の、大わた、瀬むとも、昔の人に、またも逢はめやも。

富士山の長歌竝に反歌

山部赤人

天地のわかれし時ゆ、神さびて、高く貴き、駿河なる、布士の高嶺を、天の原、ふりさけ見れば、渡る日の、かげもかくろひ、照る月の、光も見えず、白雲も、い往きは、かり、時じくぞ、雪は、ふりける、語り、継ぎ、言ひ、継ぎ、ゆかむ、不盡の高嶺は。

田兒の浦ゆ、うち出でて見れば、眞白にぞ、不盡の高嶺に、雪は降りける。

子等をしのぶ短歌

山上 憶良

白がねも、黄がねも、玉も、なにせむに、まされる寶子に、しかめやも。

勇士をしたふ短歌

大伴 家持

丈夫は、名をし立つべし、のちの世に、聞き、繼ぐ人も、語りつぐがね。

第二節 散文

散文の發達 當期は、古來の傳説、遺聞等を集録せる、國史、風土記等の文出で、又祝詞より宣命の文を産み出せり。

一、古事記 元明天皇の朝、太安磨が、稗田阿禮の口演を筆録せる書なり。神代より推古天皇までの歴代の史傳を記し、勉

古事記三卷、和銅五年、紀元一三七二年に成り、我が國の傳説を記せる

最古の書なり。英人チヤンメン氏、嘗てこれを英文に翻譯せり。

めて國語のまゝに綴り、質實にして趣味あり。

天照大御神、天の岩屋より出で給ひし一節

天兒屋命、布刀玉命、かの鏡をさし出でて、天照大御神に見せ奉る時に、天照大御神いよ、奇しと思ほして、稍戸より出でて、臨みます時に、かの隠り立てる天手力男神、その御手を取りて、引き出し奉りき。即ち布刀玉命、尻久米繩をその御後方に引きわたして、こゝより内にな還り入りましそと申しき。故天照大御神出でませる時に、高天原も葦原の中つ國も、あつから照り明りき。

風土記は、和銅六年、紀元一三七三年、始めて諸國に奉らしめしなり。

宣命の今に存せる最も古きは、横日本書紀に散見し、文武天皇より桓武

二、風土記 朝廷より諸國に命じて、傳説、舊聞、産物等を集録して、奉らしめしものにして、大抵散佚せしが、常陸、播磨、出雲の風土記等、今に傳れり。

三、宣命 當期、天皇より百官、庶民に賜れる詔勅を、漢文の詔勅と區別して宣命といふ。百官の前にて、朗讀せしものなれ

天皇の時までのものあり。

ば、莊重にして、語調佳なり。當時に於ける君臣、上下の關係をも、推知し得べきものあり。

文武天皇御即位の宣命の一節

この統國天の下を調へ給ひ、平げ給ひ、天の下の公民を、恵み給ひ、撫て給はむと、なも、隨神思ほしめさくと、詔り給ふ天皇が大御言を、諸聞し召さへと詔る。

第三節 漢文學及び佛教

一、漢文學の勃起 大化の新政以後、漢文學大に起り、律令、格式その他の散文も、概ね漢文を用ゐたれば、斯學の研究盛に、吉備眞備、安倍仲麿の如きは、名聲を唐土に轟せり。左の二書も當期に出でたり。

(一) 日本書紀 元正天皇の朝、舍人親王等が勅を奉じて、神代より持統天皇までの歴代の史蹟を、漢文にて綴れるもの

漢文學の研究。

日本書紀三十卷、養老四年、紀元一三八〇年に成れり。

六國史の創作。

懷風藻一卷、淡海三船の撰ともいへど疑はし。漢詩集の初撰。

佛教の感化。

韻文の模範。散文の基礎。

にして、謂はゆる六國史撰修の初なり。

(二) 懷風藻 撰者詳ならず。天武、持統、文武、三代間の詩集にして、我が國に於ける漢詩撰集の初とす。

二、佛教の影響 聖武天皇大に佛教を好み、國分寺を置き、東大寺を建て、大佛を造り給ひ、孝謙天皇亦これを信じ給ひ、行基等の名僧も出でて、佛教の信仰甚だ盛に、その感化、儒教の上において、文學にも自ら影響を及したり。

第三章 結論

上古の歌謠は、當期に至り、長歌及び短歌の各方面に、著しき進歩をなし、範を後世の韻文界に示して、殆ど韻文の世とも稱すべく、宣命は、主として祝詞の後を受けて、我が國、散文の

基礎を築きぬ。故に當期の文學は、爛漫たる平安期文學の精華を、萌芽せるものといふべし。

概 括

韻 文萬葉集。散文古事記、日本書紀、立風土記、命記。漢文學日本書紀、風土記。佛敎の影響出現。

前期に設けられし大學國學は、更に學制を改め、漸次整頓せられたり。

紀元一四四一年、桓武天皇の初の頃より、紀元一八五二年、鎌倉幕府創立の頃までの文學を平安朝の文學といふ。

國文學の隆起。

文運の極盛期。

纖弱浮華の風。

第二期 平安朝の文學

第一章 通 論

一、發達 前期以來の漢文學流行と、假名の製作とは、當期國文學發達の基礎となり、藤原氏の盛時に及びては、國文學も亦勃然として隆起し、才媛文士、得意の筆翰を揮ひ、詞采絢爛、散文の能事を極め、韻文は、短歌大に發達せり。故に當期は、我が國の散文を大成し、古代文運の極盛期といふべし。
二、思想 古來、樸實なりし我が國民の思想は、當期に至り、漸く文弱に陥り、奢侈に流れ、優雅艷麗なる中にも、自ら纖弱浮華の風を存し、末葉、次第に勇武の氣象を帯びたり。
三、文字 奈良朝の頃より、當時代にかけて成りし片假名、平

片假名の起原。

假名は、當期より廣く世に行はるゝに至れり。
(一) 片假名 假名は、眞名に對する稱にして、片假名は、多くは漢字の偏旁等を取れるものなり。而して片假名、五十音圖、共に吉備眞備の作と言ひ傳へたるものあれども信じ難し。蓋し一個人の創作にはあらざるべし。

は梵字の一部分を取れるかといふ。

阿伊宇江於加幾久介己散之須世會多千川天止奈二奴祢乃八比不反保末三牟女毛也伊由江與良利流礼呂和井宇慧乎。

平假名の起原。

(二) 平假名 平假名は、漢字を草略せるものにして、以呂波歌は、佛典の偈を意譯したるものなり。而して平假名、以呂波歌、共に弘法大師の作と言ひ傳へたるものあれども定説なし。これ亦一個人の創作にはあらざるべし。

以呂波歌 色は匂へど、散りぬるを、我が世誰ぞ、常ならむ。有爲の奥山、今日越えて、淺き夢見し、酔もせず。

以呂波仁保反止知利奴留遠(諸行無常)和加與太礼會川祢奈良武(是生滅法)宇爲乃於久也末計不己衣天(生滅滅已)安左幾由女美之惠比毛世寸。(寂滅爲樂)无。

散文發達の原因。

(三) 假名の功果 假名の發明は、我が國文學の進歩に、非常なる功を奏せるものにして、思想を自在に直寫すべき好機關を得たれば、これより散文の發達となり、我が國の文學は、屢々として一瀉千里の勢をなせり。
四、作品 以上の思想文字の發露する所、物語、隨筆、日記、紀行、雜史、短歌等となりて、後世に傳れり。左にこれを略述せむ。

第二章 各論

第一節 散文

第一類 物語

一、竹取物語 作者詳ならず。竹取の翁の、竹管中より得て、養育せし赫哉姫につきての事實を記したる物語なり。行文、古

竹取物語二卷あり。

雅流暢にして、滑稽をも交へたり。

竹の中の人 (發端)

今は昔、竹取の翁といふものあり。野山にまじりて、竹を取りつゝ、よろづのことにつかひけり。名をば讚岐の造磨となむいひける。その竹の中にもと光る竹一すぢありけり。あやしがりて、寄りて見るに、筒のなか光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。

二、伊勢物語 在原業平の作かとも思はるれども、未だ確説なし。多くは業平の詠歌を主とし、その由來を簡短なる小話に作れるものにして、行文簡潔古風なり。

業平東下の一節

昔男ありけり。その男、身をやうなきものに思ひなして、みやこにはをらじ、住むべき所もとめむとてゆきけり。三河の國、八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といふことは、水の蜘蛛手に流れわかれて、木八つ渡せるによりてなむ、八橋とはいへる。その澤のほとりに、木蔭に下りゐて、乾飯くひけり。そ

の澤に、かきつばた、いとあもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、かきつばたといふ五文字を、句のかみにすまて、旅の心をよめといひければ、
から衣きつゝ、なれにしづましあれば、はるくさぬる。たびをしぞ思ふ。
とよめりければ、みな人、かれいひの上、に涙おとして、ほとびにけり。

後に出でたる大和物語も、これに倣へる物語なり。

三、源氏物語 貴族社會の狀態を寫せる長篇の物語なり。

(一) 作者 作者は紫式部にして、藤原爲時の女、幼より聰慧、廣く和漢の學及び佛教に通じ、藤原宣孝に嫁せしが、早く夫を失ひて寡居し、その後は、一條天皇の中宮、藤原彰子に仕へて、寵遇を受け、謙讓貞淑を以て聞えたりき。

(二) 記事 光源氏とその子薫大將との事を記し、その間に種々の人物事件を擧げて、巧に各人の特質を表し、當時の貴

源氏物語は五十四帖、前の四十四帖は、専ら光源氏の榮華を敘し、後の十帖は、その子薫大將の失意を述べ、父子の境遇を對照せり、先年末松謙澄氏、これを英文に翻譯せしことあり。
紫式部。

族社會の生活、及び人情風俗等を寫し、帖々趣を異にし、殆ど人生の喜怒哀樂を描き盡せり。

國文中の秀逸。

(三) 文體 奇構妙想、筆華濃艶にして、起伏照應し、措辭周到にして、井然不紊は、我が國文中の秀逸といふべし。

光源氏、須磨の佗住ひの一節(須磨の卷)

旅人の秋涼しくなりけり、關吹き越ゆる須磨のうら波。在原行平。

須磨には、いと心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、關ふきこゆるといひけむ浦波、夜々はげにいと近く聞えて、またなく哀なるものは、かゝるところの秋なりけり。御前にいと人ずくなにて、うちやすみわたれるに、一人目をさまして、枕を歌て、四方の風を聞き給ふに、浪ただこゝもとにたちくる心地して、涙おつとも覺えぬに、枕深くばかりになりけり。琴を少しかき鳴し給へるが、われながらいとすごう聞ゆれば、ひきさしたまひて、

こひわびて、なく音にまがふ、浦浪は、思ふかたより、風やふくらむ。

と歌ひ給へるに、人々おどろきて、めてたう覺ゆるにしのばれて、あいなら

起きあつゝ、はなをしのびやかに、かみわたすげに、いかに思ふらむ、わが身ひとつにより、親はらから片時たちはなれがたく、程につけつゝ、思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへるとおぼすに、いみじくて、いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふらむとおぼせば、盡は何くれと、たはぶれ言、うちのたまひ紛はし、徒然なるまゝに、いろくの紙をつぎつゝ、手習をしたまふ。珍しき様なる唐の綾などに、様々の繪どもをかきすさび給へる屏風のおもてどもなど、いとめてたく見どころあり。

四、その他の物語 以上の外、宇津保物語、落窪物語、濱松中納言物語等の著あり。皆當時の風俗の一斑を知るに足る。

第二類 隨筆

枕草紙 古くは清少納言記といひ、奉仕中の事實多し。

(一) 作者 作者は清少納言にして、清原元輔の女、故事古典を諳んじ、才情溢るゝが如し。一條天皇の皇后、藤原定子に仕

此等の物語は、作者及び著作の年代、共に詳ならず。

枕草紙三卷、源氏物語と相並びて、國文の雙璧と稱せらる。

清少納言。

隨筆の拔羣。

へて眷遇を受け、紫式部と共に才名一時に高かりき。
(二)記事 見聞の事實を随録し、著目奇警、觀察緻密、四季の景物、宮廷の事件を主として、種々の事項を記せり。

(三)文體 簡潔銳利、一氣呵成の妙あり。隨筆文の拔羣たり。

四季のさま(發端)

春はあけぼのやうく白くなりゆく山ぎはすこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。夏はよる月のころはさらなり、やみもなほ螢とびちがひたる。雨などのふるさへをかじ。秋は夕ぐれ、夕日はなやかにさして、山のはいと近くなりたるに、鳥のねどころへゆくとして、三つ四つ二つなど、とびゆくさへあはれなり。まいて、雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆる、いとをかじ。日入りはて、風のおと蟲のねなど、いとあはれなり。冬はつとめて、雪のふりたるは、いふべきにもあらず、霜などのいと白き、又さらてもいと寒き、火などいそぎあとして、炭もてわたるも、いとつきくし。盡になりて、ぬるく緩びもてゆけば、炭櫃火桶の火も、白き灰がちになりぬるは

わろし。

第三類 日記紀行

一、紫式部日記 紫式部が、藤原彰子に奉仕せる間に見聞せし事實を記し、式部の性行を知り得べき所あり。

二、土佐日記 紀貫之が、土佐國守の任満ちて、歸京せる時の海陸紀行なり。旅中、亡兒を悼み、海賊、波濤を恐れし事などを記し、諧謔をも交へ、簡淨の文にして、紀行文の嚆矢なり。

土佐日記十二月二十七日の條

二十七日、大津より浦戸をさしてこぎいづ。かくあるうちに、京にて生れたりし女子、こゝにして俄にうせにしかば、この頃のいてたちいそぎを見れど、何事もえいはず。京へ歸るに、女子のなきのみぞ悲みこふる。ある人々もえ堪へず。この間に、ある人のかきていだせる歌、
都へと、おもふもの、悲しきは、かへらぬ人の、あればなりけり。

紀行文の嚆矢。
米人ハリス氏、土佐日記を英譯せりといふ。

第四類 雜 史

榮華物語は四十一卷、赤染衛門の作とも傳ふれど據り難し、古くは世繼物語の名あり。

大鏡八卷を藤原爲業の著といへる説信じ難し。この書は亦世繼物語ともいへり。

今昔物語六十卷、宇治大納言物語ともいひ、作者は、後三條天皇の頃の人、畧を宇治の別荘に避けて、この書を作れりといひ傳ふ。

和漢調和文の階梯。

一、榮華物語 作者詳ならず。宇多天皇の頃より、堀河天皇の頃までに涉り、藤原道長を中心とし、藤原氏榮華の状況を主として、當時の事迹を記せり。
二、大鏡 作者詳ならず。文徳天皇より後一條天皇までの歴史にして、皇室と藤原氏とに關し、主として藤原氏の榮華を寫し、その間自ら褒貶の意をも寓せり。
三、今昔物語 源隆國の撰なりといふ。和漢、天竺に涉りて、歴史上の逸話より、種々の奇談、怪説に至るまで、彫琢を加へずして記録したれば、當時、一般人の生活の状態、竝にその抱きし思想等を知るに足るもの多し。又文中に漢語を多く用ゐたるは、和漢調和文體に入るべき階梯なりとす。

今昔物語 源賴義が安倍賴良を討ちし事の一節

賴良は、賴時の初の名、當時陸奥に居て、勢力強大、遂に關河(イサハ)、和賀、江刺、稗拔(ロエマキ)、志波(シハ)、若手、六郡の藩帥となりぬ。

今は昔、後冷泉院の御時に、六郡の内に、安倍賴良といふものありけり。その父をば、忠良となひいひける。父祖、世々を相繼ぎて、曾の長なりけり。威勢大にして、これに従はざるものなし。その伴類廣くして、漸く衣川の外に出づ。代々の國司、これを制すること能はず。然る間、永承の頃、國司多くの兵を發して、これを攻むといへども、賴良諸の會を以て、これを防ぎ、戰ふに、國司の兵伐ち反されて、死ぬるもの多し。公この事を聞き召して、速に賴良を討ち奉るべき宣旨を下されぬ。源賴義朝臣に仰せてこれを遣す。賴義、鎮守府の將軍に任じて、太郎義家、二郎義綱、竝に多くの兵を相具して、賴義を討たむがために陸奥に下りぬ。

第二節 韻 文

歌風の變遷。

和歌の趨勢 清和、宇多、兩朝の頃より、題詠、歌合、盛に行はれ、長歌衰へて、短歌に風姿の優雅婉麗を競ふ趨勢となりぬ。又當期より七五音の調を好む風を生じたり。

第一類 和歌

古今集二十卷、歌
數千百十一首あり。

勅撰集の權
輿。

六歌仙。

古今調。

歌學第一の書。

獨人ランケ氏、英
人チヤンパレン
氏、この書の歌を
翻譯せしことあり。

一、古今和歌集 本書には、主として短歌を載せたり。

(一) 撰者 醍醐天皇、延喜五年(紀元一五六五年)紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑等、勅を奉じて撰せしものにして、萬葉集以後の歌を集む。謂はゆる勅撰集の權輿なり。

(二) 歌人及び歌風 撰者の外に、本集の序に評して、六歌仙と稱せられし僧正遍昭、在原業平、文屋康秀、喜撰法師、小野小町、大伴黒主等は、この集屈指の歌人なり。その歌、概して修辭巧妙、優雅艷麗にして、斯道の模範と仰がる。謂はゆる古今調これなり。故に後世、本書を以て、歌學第一の書となせり。

春立ちける日よめる

紀貫之

袖ひぢて、むすびし水の、こほれるを、春たつけふの、風やとくらむ。

在原業平

洛の院にて櫻を見てよめる

世のなかに、絶えて櫻の、なかりせば、はるの心は、のどけからまし。

郭公の鳴くをきいてよめる

紀友則

音羽山、けさこえくれば、ほととぎす、木末はるかに、今ぞなくなる。

白菊の花をよめる

凡河内躬恒

心あてに、折らばやをらむ、はつ箱の、おきまどはせる、白菊のはな。

住吉に詣てたる人によみて遣しける

壬生忠岑

住よしと、海人はつぐとも、長居すな、人わすれ草、おふといふなり。

二、後撰和歌集 村上天皇の天曆五年、梨壺の五人と稱せら

梨壺の五人。

れし大中臣能宣、清原元輔、源順紀時文、阪上望城等の手に成

れる勅撰歌集にして、その歌、概して古今集に及ばず。

三、拾遺和歌集 花山天皇の御撰なりといひ、又藤原公任の撰ともいひて、撰者及び撰集の時代詳ならず。

三代集。

三代集 以上三種を世に三代集と稱す。

四、勅撰和歌集四種 以後、白河天皇の朝より、後鳥羽天皇の朝に至るまで、後拾遺、金葉、詞花、千載の勅撰集あり。

第二類 郢曲

郢曲の流行 當期に、神樂歌、催馬樂歌あり。中葉の頃まで盛に行はる。又朗詠竝に今様歌あり。

一、朗詠 漢詩、漢文、和歌等の雅趣ある佳句に、曲節を附して諷誦するものを朗詠といふ。當期中葉より行はれたり。

和漢朗詠集 藤原公任の撰なり。愛誦すべきもの多し。

和漢朗詠集二卷あり。この後、藤原基俊、新撰朗詠集二卷の撰あり。

早春

氣霽風梳、新柳髮、冰消浪洗、舊苔鬚。

都良香

山風に、とくるこぼりの、ひまごととに、うち出づる浪や、はるの初花。

源正純

二、今様歌 今様歌は、七五音の句を重ねたるものにして、四聯の歌殊に多し。當期中葉の頃より行はれて、次期に及べり。

蓬萊山

蓬萊山には、千歳ふる、萬歳千秋、かさなれり。

松の枝には、鶴巢くひ、巖のそばには、龜遊ぶ。

第三節 漢文學及び佛教

一、漢文學の盛衰 漢文學は、前期より繼續して盛に行はれ、嵯峨天皇は、殊にこれを奨勵し給ひ、僧空海、小野篁、都良香、菅原道真、紀長谷雄、三善清行等の碩學出で、その他の文人も、文選、白氏文集等を読み、漢詩、漢文を作るなど、頗る隆盛なりしが、天曆以後、漢土との交通稀に、國文學の振起につれて、漸く衰微に趨けり。左の撰著も當期に出でたり。

文選六十卷、梁の武帝の子昭明太子蕭統の編にして、古來の詩文を類聚せり。
白氏文集七十一卷、唐の白樂天の詩文集なり。

以呂波歌も亦今様歌の體なり。

六國史の完成。

佛教の感化。

(一) 國史 前期に日本書紀の撰ありしが、當期に至りては、續日本書紀、日本後紀、續日本後紀、文德實錄、三代實錄の撰修あり。合せて本朝の六國史といふ。

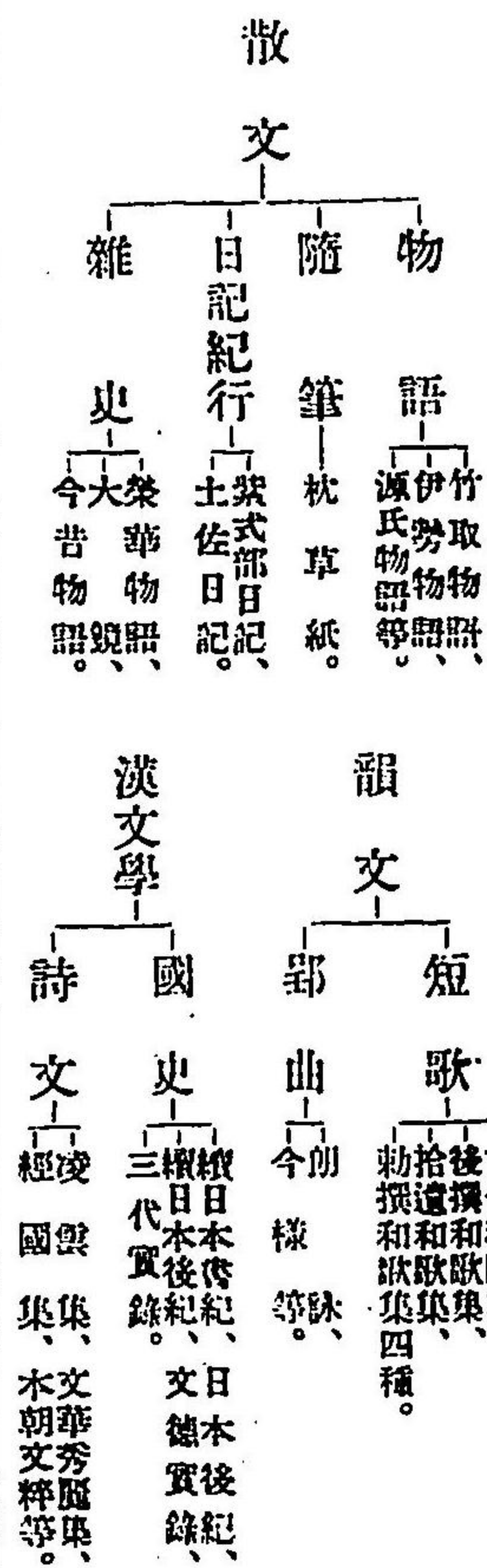
(二) 詩文 凌雲集、文華秀麗集、經國集、本朝文粹等は、當期文士の詩文を集めたる書なり。

二、佛教の影響 當期、天台、眞言の二宗、盛に行はれ、最澄、空海等の高僧出て、天皇を始として、一般國民の歸依甚だ篤く、年忌を修し、冥福を祈りしは勿論、國家の事變、天災、出産、疾病等にも、讀經、祈願せしめしなど、佛教及び僧侶は、大に世に尊信せられ、感化、儒教の上にあるしかば、文學にも多くその思想を混入するに至れり。

第三章 結論

奈良朝の古事記、宣命等の文は、當期、假名の發明に遭ひて、その面目を改め、我が國、特有の假名文を大成して、散文の進歩著しく、韻文は、短歌盛に起りて、範を後世に垂れたるなど、當期文學の思想、及び發表の形式、共に嶄然として、頭角を露し、前期の文學の上に超越せしが、末葉に及びては、藤原氏の衰運と共に、漸次萎靡の徵候を呈せり。

概括



當期大學國學は、愈々改革整頓し、私學には、和氣廣世の弘文院、藤原冬嗣の勤學院、桓仁親王の淳和學院、在原行平の獎種智院等あり。

假名文の大成。短歌の模範。

紀元一八五二年、鎌倉幕府創立の頃より、紀元二〇五二年、南北朝合一の頃までの文學を鎌倉時代及び南北朝の文學となす。

散文の一生面。

勇壯の氣象。

佛教思想。

漢語、佛語の使用。

第四期 鎌倉時代及び南北朝の文學

第一章 通論

一、變遷 當期は、戰亂相踵ぎて、士民専ら武藝を事とし、文學も自ら衰微に陥り、主として僧侶の手に歸せり。されども、悲壯なる戰爭談、哀怨なる無常談を記せる散文等、新に出てて一體を成し、韻文は、漸次に衰へたり。

二、思想 武家の勃興と共に、國民は、漸く勇壯の氣象を帯びたれども、騷擾絶えずして、轉變頼みなき時勢なれば、自ら世の無常を觀じ、佛教思想に富めるもの多し。

三、文字 假名の用法も自在となり、巧に漢文の用語、句法、及び佛教中の語を多く使用するに至れり。

四、作品 以上の思想文字の發露する所、戰記、隨筆、紀行、雜史、短歌等の作品となりて、後世に傳れり。左にこれを略述せむ。

第二章 各論

第一節 散文

第一類 戰記

和漢調和文の出現。

保元物語、平治物語は各三卷、葉室大納言時長の作ともいへど詳ならず。

平家物語は十二卷、信濃前司行長

戰記文の起原 國文中に於ける漢語の混和は、平安朝時代の末葉より形迹ありしが、當期に入りては、一種の和漢調和文となりて表れたり。その最初に出でたるは戰記文なり。

一、保元物語 平治物語 共に作者詳ならず。保元、平治の戰況を記し、當期に於ける戰記文の先鞭を著けたり。

二、平家物語 著者詳ならず。平家の盛衰を記し、佛説、佛語多

の著と傳ふれどし信じ難し。

く、流暢にして諷誦に適し、琵琶に利しても語りしものなり。

平家物語の發端 盛者必衰

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を表す。驕れる者久しからず、唯春の夜の夢の如し。猛き人も遂に亡びぬ。偏に風の前の塵に同じ。遠く異朝をとぶらふに、秦の趙高、漢の王莽、梁の周伊、唐の祿山、此等は皆舊主、先皇の政にも從はず、樂を極め、諫をも思ひ入れず、天下の亂れむことをも悟らずして、民間の憂ふる所を知らざりしかば、久しからずして亡じにし者どもなり。近く本朝を窺ふに、承平の將門、天慶の純友、康和の義親、平治の信賴、此等は驕れることも猛き心も、皆とりくみなりしかども、間近くは、六波羅の入道、前の太政大臣、平朝臣清盛公と申し、人の有様、傳へ承ること、心も言葉も及ばれぬ。

三、源平盛衰記 作者詳ならず。源平兩家の盛衰を記し、平家物語よりも一層委曲を盡せり。

四、太平記 小島法師の撰なりといふ。主として南北朝争亂

源平盛衰記四十八卷、これも葉室大納言時長の作ともいへど確證なし。

太平記四十一卷、

花園天皇文保二年より、後村上天皇正平二十二年まで五十四年間の記事あり。
英人アクシヨンは替て方丈記を英文に翻譯し、長明をナルソナルスに比せしことあり。
和漢調和文の上乗。

の顛末を記し、悲壯慷慨にして、専ら尊王の大義を敷衍せり。

第二類 隨筆

一、方丈記 鴨長明の隨筆なり。長明、日野山、方丈の室に籠りて、天災地變の實況、自己の經歷、草菴の光景等を記し、その間に人生の無常を論じ、趣致巧妙、和漢調和文の上乗なり。

世の無常 (發端)

近く川の流は絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、且消え且結びて、久しく留ることなし。世の中にある人と住處と亦かくの如し。玉敷の都のうち、棟を並べ薨を争へる高き賤しき人の住居は、代々を経て盡せぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年焼けて今年は造り、あるは大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。處も變らず、人も多かれど、古見し人は、二三十人が中に、僅に一人二人なり。朝に死に夕に生るゝ習、唯水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて、何方へか去るを。又知らず、假のやどり、たがた

隨筆の雙壁。

阿佛尼、その子爲相の所領を爲氏に奪はれしを訴へむとて、京より下向せしなり。
日記の出色。

めにか心を惱し、何によりてか目を悦ばしむるを。その主人と住處と無常を争ふさま、いはゞ朝顔の露に異ならず。あるは露落ちて、花残れり。残れりといへども、朝日に枯れぬ。あるは花は萎みて、露なほ消えず。消えずといへども、夕を待つことなし。

二、徒然草 兼好法師の漫筆にして、佛説を經とし、老莊を緯とし、道德上の訓戒となるべきもの多し。平安朝の文體に擬ひたれども、巧に漢語、佛語を使用し、枕草紙と並び稱せらる。

第三類 紀行

一、十六夜日記 藤原爲家の室、阿佛尼が、京より鎌倉に下りし紀行なり。平安朝の文體に擬ひたれども、用語、文派自ら新しく、哀楚、痛怨、歎恨の情、紙上に溢れ、土佐日記と共に、行はる。
二、紀行二書 海道記は源光行、東關紀行は、その子親行の作なり。共に簡勁の文にして、巧に和漢の典故を引用せり。

第四類 雜史

増鏡三卷、一條冬
其の著ともいへど
然らず、南北朝頃
の人の作なるべ
し。

神皇正統記は六
卷、親房が陣中筆
を執りて、吉野の
行宮に獻せしもの
なりとの説あり。

一、雜史三種 水鏡は、中山忠親の筆に成り、神武天皇より仁
明天皇まで。今鏡は、作者詳ならず。後一條天皇より高倉天皇
まで。増鏡も、著者詳ならず。後鳥羽天皇より後醍醐天皇まで
の事實を記し、暗に北條氏の跋扈を憤慨する意を寓せり。以
上は、皆大鏡の體裁に倣へるものなり。

三鏡及び四鏡 大鏡、水鏡、増鏡を三鏡といひ、今鏡を合せ
て四鏡といふ。共に歴史上の好資料なり。

二、神皇正統記 北畠親房の撰にして、神代より後村上天皇
に至るまでの事迹を記せり。作者は、逆臣の專横を憤りて、皇
統の正閏を辨ぜむことを期し、論議正大、筆鋒謹嚴、忠誠の氣、
紙上に活現し、行文暢達にして、堂々たる史筆なり。

宇治拾遺物語は五
卷、十訓抄三卷、
著聞集二十卷あ
り。

當時藤原爲家の三
子、二條(爲氏)、京
極(爲教)、冷泉(爲
相)の三家に分れ、
歌學の師範と稱し
て、その傳統を争
へり。

新古今集二十卷、
千九百七十九首の
歌を載せ、定家、家
隆、撰者の主なる
ものにして、後鳥
羽上皇の親裁し給
ひしものなり。

三、雜纂三種 宇治拾遺物語は、雜談を記し、十訓抄は、訓話を
録し、共に作者詳ならず。古今著聞集は、橘成季の作にして、雜
事、逸話等を記せり。以上は、今昔物語の體裁に倣へり。

第二節 韻文

歌道の衰運 當期の初は、短歌頗る隆盛にして、後鳥羽天皇
和歌所を起し、大に斯道を奨勵し給ひしが、その後、歌學の師
範、傳授の事起り、煩雜なる型式を立て、著想の奇拔を尙ばず
して、語句の新様を銜へるゆゑ、歌學は、漸次、衰運に趨けり。

第一類 和歌

一、新古今和歌集 元久二年(紀元一八六五年)後鳥羽上皇の
院宣によりて、藤原定家、同家隆、源通具、藤原有家、同雅經等こ
れを撰せり。上皇、藤原良經、撰者等を始として、西行法師、寂蓮

新古今調。

法師、式子内親王、宮内卿等の歌を集め、古今集に亞ぎ有名な歌集にして、清新の趣を存し、著想の進歩を見ざれども、用語、句法等の雕琢に至りては、前代無比といふべく、世にこれを新古今調と稱して推重す。

水郷春望といふことを

後鳥羽上皇

みわたせば、山もとかすむ、水無瀬川、ゆふべは秋と、なに思ひけむ。

西行法師すゝめて百首の歌よませけるに 藤原定家

見渡せば、花も紅葉も、なかりけり、うらのとまやの、秋のゆふぐれ。

百首の歌奉りし時 同人

駒とめて、袖うちらはらふ、かげもなし、佐野のわたりの、雪のゆふ暮。

湖上の冬月といふことを 藤原家隆

志賀の浦や、とほざかりゆく、浪間より、こほりていづる、有明の月。

題しらず 西行法師

こゝろなき、身にもあはれは、知られけり、鴨たつさはの、秋の夕暮。

宗良親王の撰びし新葉和歌集二十卷は、南朝人の歌を集め、亦勅撰に準ぜられたり。

八代集 古今集より新古今集までを八代集といふ。

二、勅撰和歌集十二種 新古今集以後、後龜山天皇の朝まで、新勅撰、續後撰、續古今、續拾遺、新後撰、玉葉、續千載、續後拾遺、風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺の勅撰歌集あり。

二十一、代集 八代集及び右の十二歌集に、次期に成れる新續古今集を加へて、二十一、代集と稱す。

三、當時の歌集 山家集は、西行法師の歌集なり。法師は、世事を抛ち、飄然として四方に遊び、その歌、絶塵脱俗の趣あり。源實朝の家集に、金槐和歌集あり。その歌、萬葉集の調を學び、勁健頗る見るべきものあり。世に行はるゝ小倉百人一首も、この頃より傳り、定家の撰ともいへど詳ならず。或は定家が、中院入道(蓮生)の囑によりて染筆し、入道これを小倉山莊の障

源實朝の歌。
小倉百人一首。
中院入道(蓮生)は、宇都宮頼綱の法名なり。

子に貼附せしもの、漸次世に流布せるかとの説あり。

第二類 郢 曲

一、今様歌 前期以來の今様歌は、當期盛に行はれたり。

春の彌生(四季の歌の中)

慈 鎮 和 尚

春のやよひのあけぼのに、四方の山邊を見わたせば、
花ざかりかも、しらくもの、懸らぬ峰こそ、なかりけれ。

二、宴曲 今様、朗詠の混和したるが如き、宴曲といふもの行はれ、主として宴遊の時、口唱せられたり。

第三節 漢文學及び佛教

一、漢文學の衰運 大江廣元、三善康信、菅原爲長、僧玄慧等の如き漢文學者ありしかど、一般人の間には、斯學を修むるもの少く、その文殆ど漢文の風調を失ひ、貞永式目、東鑑の如き、

玄慧は、後醍醐天皇の侍講たりき。

記録體の漢文。書翰文の出所。

拙劣なる記録體の漢文、朝廷、幕府の公文、記録にも用ゐらる。後世の書翰文は、亦これより出てたる別體なり。

源頼朝の書翰の一節(東鑑)

武士之上洛候事者、爲令追討朝敵候也。朝敵不候者、武士又不可令上洛。武士又不令上洛者、不可致狼藉候。歟。中略。以此旨、可令申沙汰給候。恐々謹言。

二、佛教の影響 當時、一般の武人は、文事を輕んじて顧みず。専ら文筆を事とせしは、僧侶にして、著作多くその手に成りしかば、當期文學の佛教思想に富めること、故なきにあらず。且禪宗、淨土眞宗、日蓮宗等、盛に行はれて、深く人心を感化したれば、佛教の文學に波及せる影響も著しきものあり。

佛教の感化。

第三章 結 論

平安朝より傳れる雅文は、當期に至りて繼續せられたれど、

和漢調和文の創成。

漸次に衰へ、他の一方にては、和漢調和文を創成し、韻文は、初期に異彩を放ちたれども、遂に萎靡振はずして、復、昔時の盛運を見るを得ず。即ち當期の文學は、概して衰微したれども、或一面には、新奇の體を創めて、文學の系統を持続せりといふべし。

概括

當期、幕府に學問所を置きしが、學校の設なかりしかば、一般の教育振はず、普通の人ば寺院にて學び、大學問學も廢減し、學舎は武藏に金澤文庫ありしのみ

散文

職記「保元物語、平治物語、平家物語、源平盛衰記、太平記」

隨筆「方丈記、徒然草」

紀行「十六夜日記、海遊記、東關紀行」

雜史「水鏡、今鏡、增鏡、神皇正統記、宇治拾遺物語、十訓抄、古今著聞集」

漢文學—發微。佛教の影響—顯著。

韻文

短歌「新古今和歌集、勅撰和歌集十二種、山家集、金葉和歌集」

蜀山「今樣、今樣」

第五期 室町時代の文學

第一章 通論

紀元二〇五二年、南北朝合一の頃より、紀元二二六三年、江戸幕府創立の頃までの文學を室町時代の文學となす。

國文學の衰微。新文藝の出現。

一、變遷 當期は、畏くも皇室の式微を極め、幕政紊亂、群雄割據して、爭鬪殆ど絶えず。平時も課税重きに過ぎ、庶民生活に苦みて、修學の餘裕なかりければ、一般文學の衰微せしこと亦故なきにあらず。而して、將軍の佚樂に供せし文藝進歩して、謠曲の文起り、下民の間よりは狂言記出で、從來の和歌衰へて連歌行はれ、斯文一縷の命脈は、主として僧侶の手に依りて保たれたり。

二、思想 足利將軍、相繼ぎて豪奢を極め、諸大名も亦これに倣ひて、苟且偷安を事とせしが、下民は窮困して、饑餓凍餒の

幽鬱の思想。

患已む時なければ、一般人の思想、幽鬱に沈めり。
 三、文字 前期の和漢調和文は、今期に繼續して、假名と漢字とを交へ、佛語の文字を使用すること更に多くなりぬ。
 四、作品 以上の思想文字の發露する所、謠曲、狂言記、連歌等の作品となりて、後世に傳れり。左にこれを略述せむ。

第二章 各論

第一節 散文

第一類 謠曲

一、起原及び特色 前期に、琵琶法師、白拍子、曲舞、田樂、猿樂等の舞曲ありしが、當期に至り、支那より傳れる雜劇を折衷して、能樂を創作し、これに合せむがために謠曲を作りぬ。普通

謠曲の創作。

に行はるゝもの二百餘番、多くは學僧の手に成り、史談、巷説等を資料として、古英雄の靈を弔ひ、佛教の思想を含めるもの多し。趣向、千篇一律の嫌あるを免れず。

二、文體及び流派 物語、戰記、漢書、佛典等より、秀句、佳章を探り來り、換骨脫體、巧に補綴して語調を整へ、懸詞最も多く、對話の詞は、當時の通用語らしく、優婉悲愴、味ふべき所ありて、普通の散文とは、趣を異にせり。その流派は、觀世、寶生、金春、金剛等に分れたり。

鉢の木の一節

シテ「とてもこの身は埋木の、花咲く世にあはむ事、今この身にてはあひがたし。ッレ」唯いたづらなる鉢の木を、御身のために焚くならば、シテ「是ぞ誠に難行の、法の薪と思し召せ。ッレ」しかもこの程雪ふりて、シテ「仙人に仕へし雪山の薪、ッレ」かくこそあらめ。シテ「我も身を、地捨人の爲の鉢の木切る

次期には、喜多流起りたり。

鉢の木のこの一節は、北條時頼、行脚僧となりて、諸國を遊行し、佐野常世の宅に宿せし時、常世が鉢の木を切り焚きて、暖を取らしめし所なり。
 シテ 佐野常世
 ッレ 常世の妻
 タキ 旅僧(時頼)

「折梅北面雪封寒」は、和漢朗詠集にある詩中の句にして、藤原爲茂の作なり。
「山里の折かけ垣の梅の花いかなる人の見じといふらむ」の歌は、菅家御集にあり。

とてもよしや惜しからじと、雪うち拂ひて見れば、面白や、いかにせむ。まづ冬木より咲きそむる、雪の梅の北面は、雪封じて寒きにも、異木よりまづ先だてば、梅を切りやそむべき。見じといふ人こそうけれ、山里の折かけ垣の梅をだに、情なしと惜みしに、今更薪になすべしと、かねて思ひさや、櫻を見れば、春ごとに花すこし遅ければ、この木やわぶると、心をつくし育てしに、今は我のみわびて住む家、櫻さりくべて、緋櫻になすぞ悲しき。シテ、さて松は、さしもげに、枝をため葉をすかして、かゝりあれと植ゑおさし、そのかひ今はあらしふく、松はもとより烟にて、薪となるもことわりや、切りくべて今ぞ御垣守、衛士の焚く火は、おためなり。よく寄りてあたり給へや。ツキ、近頃よき火にあたり、寒さを忘れて候ふ。シテ、御出により、我等も火にあたりて候ふ。

第二類 狂言記

狂言記の創製。

一、特色 狂言は、能樂と共に演ずる滑稽劇にして、その詞を記したるものを狂言記といふ。當時作られたるもの二百餘

番、趣向は、簡單にして、滑稽諧謔を旨とし、よく人の頤を解かしめ、往々諷刺の意を寓したる所あり。

二、文體及び流派 謠曲の文と異なりて、古人の語句を取らず、當時の通用語を以てし、且全篇殆ど對話にて組織し、率直愛すべき所あり。その流派に大藏流、鷲流等あり。

萩大名の一節

萩大名は、或大名が、太郎冠者より萩の歌を習ひおき、或時冠者を従へ、或庭園に往きて見物し、折節亭主の請により、豫れて習ひし如く、「七重八重九重とこそ思ひしに十重咲き出づる萩の花かな」と詠みしが、冠者を出て行きし後、亭主短冊に書かむとて、再び問ひたるに、大名は

亭主「唯今短冊に書きますも一度吟じさつしやれませう。大名「オオ心得ておじやる。七重八重九重とこそおもひしに、十重咲き出づる、イヤ冠者めは、どこもとに居るぞぢや、待てい。亭主「申し殿様、御歌に冠者はいりますまい、急いであとをよまつしやれませい。大名「ハテ短うおじやるか。亭主「なかなか足りませぬ。大名「したらば出づるを、いくつも書いて置きやれ。亭主「イヤそれでは成りませぬ。大名「ハテ冠者めが早う戻り居らいて。亭主「申し殿様、急いでよまつしやれませい。大名「こゝな奴は、諸侍に手を掛け居つて、に

既に下句を忘れし
ことを作りたるも
のなり。蓋し當時
の大名の無學をい
つせしなり。

小説、戯曲の
濫觴。

くい奴の「卒主」でも字が足りませぬ。大名「アア今思ひつけたは、卒主」なにと、
大名「もの」と卒主「なにと。大名「太郎冠者が向脇ムカフツネに、某が鼻の先、卒主「なんでも
ないこと、とつと、いかしませ。

第三類 短篇小説

一、御伽草紙 古今の説話につきて、勇壯、悲哀、滑稽の童話な
どを記せる短篇小説あり。文正草紙、鉢かつき草紙等の御伽
草紙これなり。次期に於ける小説、戯曲の濫觴をなしぬ。
二、文體 平安朝の文體に擬したるものと覺しく、所々句調
を整へ、當時の通用語をも交へ、行文、流暢にして趣味あり。

第二節 韻文

第一類 和歌

歌道の衰運 新續古今和歌集以後には、勅撰集も廢絶し、師

師範家の束縛。

範家は、傳授或は奥義、秘事などと唱へ、歌人を束縛して、圈套
を墨守せしめ、随つて新機運の見るべきものなし。

第二類 連歌

一、歌體及び沿革 連歌は、初は二人にて詠み合せしが、當期
には、數人句を連ねて、五十句、百句、千句に及べるものあり。用
語、法式の束縛なければ、貴賤共にこれを翫び、その創作は、日
本武尊、東征の時にありといひ、衣の館の連歌は、人口に膾炙
せり。南北朝の頃よりその體定り、當期に入りては、舊來の和
歌に代りて、一時に盛となり、法式も完成せり。世にこれを菟
玖波ウサハの道といふ。次期に行はるゝ俳諧の津梁となりぬ。
二、連歌集 菟玖波集は、前期、後村上天皇の朝、二條良基、僧救
濟の撰に係り、連歌の法も茲に定りて、勅撰に準ぜられぬ。當

新治筑波を過ぎて
機夜か寐つる(日
本武尊)、か、並べ
て夜には九夜日に
は十日を(火焚の
翁)。菟玖波の道の
名これに基けり。
年をへし糸のみだ
れのくるしさに
(安倍貞任)、衣の
館はほころびにけ
り(源義家)。
菟玖波の道
菟玖波集、新撰菟
玖波集、共に二十

卷、犬菟玖波集一
卷あり。

期、後土御門天皇の朝に至り、僧宗祇、花の本の勅號を賜りて、盛名を馳せ、勅を受けて新撰菟玖波集を撰べり。後柏原天皇の朝には、山崎宗鑑、犬菟玖波集の撰あり。宗鑑は、荒木田守武と共に、俳諧體を始めて次期に傳へたり。

水無瀬三吟百韻の中

雪ながら、山もとかすむ、ゆふへかな、

ゆく水とほく、うめかをるさと。

川かぜに、ひとむらやなぎ、春みえて、

舟さすおも、しるさあけがた。

月やなほ、霧わたる夜に、のこるらむ、

霜おく野はら、あきはくれけり。

宗 祇

肖 柏

宗 長

宗 祇

肖 柏

宗 長

第三節 漢文學及び佛教

一、漢文學の大勢 當期は、清原業忠、菅原秀長の如き漢文學

京都の五山は、天龍、相國、建仁、東福、萬壽の五大寺をいふ。

漢文學復興の階梯。

者あり。又明國との交通開けて文藝傳り、京都五山の僧徒に、程朱の學を研究せしものあり。足利義政は、漢籍を明より徵し、同義尚は、孝經、左氏傳を重んじて、陣中、猶書を講ぜしめ、大内義隆は、四書、五經を學習せしなど、意を漢文學に傾けしものありて、次期に於ける斯道復興の階梯をなしたり。
二、佛教の影響 當期、佛教の信仰、益、盛にして、深く人心を感化し、文學は、前期の如く主として僧侶の手にありたれば、當期文學の一層甚だしき佛教の影響を蒙れること論を俟たず。儒教の如きも、佛教に壓せられたる觀あり。

第三章 結論

當期文學は、前期の衰餘を受けて、一般に振はざりしが、謠曲、

文學趣味の波及。

狂言記の文は、特殊の發達をなし、又連歌行はれて、文學趣味を下層社會に波及したるは、亦過渡の一進歩といふべし。鬱然たる江戸文學の簇生は、その萌芽を當期の文學に發せるものもあれば、文學史上、亦忽諸に附すべからざるなり。

概括



記元二二六三年、江戸幕府創立の頃より、紀元二五二七年、大政奉還の頃までの文學を江戸時代の文學となす。

第六期 江戸時代の文學

第一章 通論

一、發達 徳川氏天下を一統し、政略上より大に文教を起して、儒者を任用し、學舎を設立し、書籍を蒐集、刊行し、又時方に泰平打ち續き、一般の人民、樂みて文學の研鑽を事としたれば、前期は、元祿時代、京阪の地を中心とし、後期は、文化文政時代、江戸の地を中樞として、各方面の文學大に發揮し、和漢調和文、完成して、雅文復興し、戯曲、小説も著しく進歩せり。又古調の和歌興り、新調の短歌も出て、或は俳諧の流行ありたるなど、文學の範圍擴張して、未曾有の盛觀を呈したり。

二、思想 當期は、封建制度の弊として、貴賤階級の懸隔甚だ

文學の發揮。
散文の簇生。
韻文の勃興。
文學未曾有の盛觀。

兩方面の思想。

思想界の根柢。

しく、國民は、上下兩層の區劃著しかりければ、その思想にも、自然、兩方面を現じ、一面は、貴族的、保守的にして、復古、嚴格、眞率の風を存し、他の一面は、平民的、進歩的にして、創意、變通、洒落の趣あり。されども、一般には、漢文學者の唱道せる儒教主義、國文學者の主張せる國家主義、當期思想界の根柢たり。

三、文字 雅文等には、假名を用ゐたる所多く、和漢調和文、戯曲小説文等には、和漢の文字を混和し、佛語の文字を使用すること甚だ少くなりぬ。

四、作品 以上の思想文字の發露する所、和漢調和文、雅文、戯曲小説、長歌、短歌、俳諧等、各種の作品となりて存せり。左にこれを略述せむ。

第二章 各論

第一節 散文

第一類 漢文學者の和漢調和文

和漢調和文の進歩 漢文學者の一部に、その學說を一般人に普及せむとの必要より、和漢調和文を作れるものありて、この種の文は、一進歩をなし、後世普通文の模範となりぬ。

五、常訓、大和俗訓、和俗童子訓、初學訓、文訓、武訓、家道訓、樂訓、君子訓、養生訓を益軒の十訓と稱す。益軒は、名を篤信といひ、普通教育唱道の功あり。

一、貝原益軒の著 益軒の著の主なるものは、大和俗訓、和俗童子訓、文訓、武訓、家道訓等の教訓書なり。孰れも懇切平易にして、實用を期し、善く童蒙婦女にも解し易からしめたり。

學問の功(大和俗訓)

凡そ人の不孝不忠、もろくの惡を行ひ、慾を恣にし、身を亡し家を滅すに至るは、何にかよれる。智なければなり。又善を行ひて、家を興し、身を保ち譽

を得るは、何の故ぞ。智あればなり。智あれば、よく善悪を知る。善のなすべきことを知りて行ひ、惡のなすまじきことを知りて行はず。このゆゑに智は身の中の大なる寶なり。學者道に志さば、智を求むるを第一とすべし。智を開くことは、學問の功にあらずんば成りがたし。

藩翰譜十三卷、讀史餘論十二卷、折たく柴の記三卷あり。白石は、名を君美といひ、才學卓越、文章雄健、後人本邦の司馬遷、マコーレーと譽稱す。

駿臺雜話五卷あり、鳩巢晩年に筆を執りて、將軍吉宗に上りしものなり。鳩巢名を直清といひ、世人稱して駿臺先生といへり。

二、新井白石の著 白石の著は、藩翰譜、讀史餘論、折たく柴の記等その主なるものなり。藩翰譜は、三百三十七諸侯の家譜等を記し、讀史餘論は、本朝古來の大勢、史蹟を論じ、折たく柴の記は、自敘傳なり。その文、識見高邁にして、筆鋒銳利なり。

三、室鳩巢の著 鳩巢の著としては、駿臺雜話を主となす。道徳學問等に關する隨筆にして、その文、高雅富瞻、巧に和漢の古語、古典を引用せり。

四、その他の雜著 湯淺常山の常山紀談、荻生徂徠の南留別志、雨森芳州の多波禮草、太田錦城の梧窗漫筆、藤田東湖の常

皇道の鼓吹。

國文學復興の主唱。

皇道の發揮。春滿は、國文學の復興、皇道の發揮を以て自ら任じた。扶桑拾葉集三十卷は、後四院天皇大に嘉賞し給ひ、勅撰に推じて、この

陸帶等は、當期漢文學者の手に成れる名著なり。漢文學者と國文學者との乖離 漢文學者には、漢土の事物に心酔し、内外本末を辨ぜざるものもありしが、國文學者は、反動として、大に皇國の大道を鼓吹し、徒に蕭牆の内に闘ぎて、和漢調和文は、一時、小説家にのみ用ゐられしこともあり。

第二類 國文學者の著作

國文學の復興 前期國文學の大勢、萎靡振はざりしが、當期は、漢文學の勃興と共に、徳川光圀、僧契沖、荷田春滿、賀茂眞淵等の主唱により、國文學大に復興して、皇國の大道も亦發揮せられ、類纂、註釋、雅文、文法等の書を始とし、著作甚だ多し。一、徳川光圀の編 光圀の編纂せしものに扶桑拾葉集あり、古今の國文の書を集めたり。光圀、又萬葉集の解し難きを遺

名か賜がしもの、
實に國文學復興の
魁といふべし。

萬葉代匠記は二十
二卷、和字正濫鈔
は五卷あり。

湖川抄六十卷、春
曙抄十二卷、文段
抄八卷、八代集抄
五十卷あり。

祝詞考三卷、萬葉
集考十四卷、古今
集打聽二十卷、冠
考十卷、あり。
宣長、千蔭、春海、
保己一等も、眞淵
の門より出てた
り。

古道の發揚。

古事記傳四十八
卷、直日靈一卷、
詔詞解六卷、古今
集遠鏡六卷、玉勝
明十五卷、玉の緒
七卷、假名遣一卷、
三音考一卷あり。
皇道の發揚。

萬葉集略解三十
卷、世に著る。う
けらが花八卷、琴
後集十五卷、雅文

憾とし、下河邊長流、僧契沖に、その註釋を託せしことあり。
二、僧契沖の著 契沖の著の主なるものは、萬葉代匠記、和字
正濫鈔なりとす。代匠記は、萬葉集の古義を解きて、その蒙を
啓き、正濫鈔は、中古以來、假名遣の誤れることなどを辨ぜり。
三、北村季吟の著 季吟の著は、源氏物語湖月抄、枕草紙春曙
抄、徒然草文段抄、八代集抄等の註釋書にして、世に行はる。
四、賀茂眞淵の著 眞淵の著は、祝詞考、萬葉集考、古今和歌集
打聽、冠辭考等なりとす。眞淵は、遠江の人、縣居と號し、春滿に
學び、萬葉集の風を尙び、その書を討究して、我が國固有の古
道を發揮し、識見甚だ高く、名聲一時に聞え、國文學の大家も
その門より輩出し、斯學の勢、屢々として海内を風靡せり。
五、本居宣長の著 宣長の著に、古事記傳、直日靈、歷朝詔詞解、

古今集遠鏡、玉勝明、詞の玉の緒、字音假名遣、漢字三音考等あ
り。宣長は、伊勢の人、鈴屋と號し、眞淵に學び、皇國の大道を發
揚せむことを期せり。搢紳の教を請ふもの亦多く、門人、全國
に洽し。その著、古事記傳は、畢生の心血を凝ぎて成り、年を閱
すること三十五年、浩瀚の寶典なり。その他の著書亦多し。

述懐の一節(玉勝明)

きのふはけふの昔にては、かなくのみ、すぎにすぎゆく世の中をつくく
とあもへば、あはれ、わが世もいくほどぞや。手ををりてかぞふれば、はや三
十ぢにもあまりにけり。いのちながくて、七そぢ八そぢいけらむにて、だに、
はやくなかばすぎぬるよと思へば、まだよごもれるやうなる身も、行先ほ
どなき心地のみして、心ぼそくぞおぼゆる。

六、加藤千蔭、村田春海の著 千蔭の著、萬葉集略解、世に行は
れ、うけらが花の文は、超脱飄逸の趣あり。春海は、漢文にも通

と和歌とを載せたり。
能文家。

羣書類従五百三十卷、續羣書類従一千卷あり。

古史傳三十二卷、古道大意二卷あり。

皇道の振張。

四大人。士清の和訓栞、成章のかざし抄、あゆみ抄、貞丈の貞丈雜記、齋藤の閑田耕筆、秋成の雨月物語、春庭の詞の八衛等、世に知らる。

じ、能文家を以て聞え、家集に琴後集あり。その文は、法格を唐宋八家に取り、折衷して別に一體を成せり。
七、塙保己一の編 保己一の編に、羣書類従、續羣書類従あり。共に我が國古來の典籍を苞羅博綜せるものなり。
八、平田篤胤の著 篤胤の著の主なるものは、古史傳、古道大意等なり。篤胤は、羽後の人、氣吹舎と號し、宣長の主義を受け、古道の振張を勉めて、盛に敬神、尊王の大義を主唱し、極力、儒佛の二教を排斥して、維新前後の志士をも鼓舞作興せり。
四大人 春滿、眞淵、宣長、篤胤を、世に國學の四大人と稱す。
九、その他の著書 谷川士清、富士谷成章、伊勢貞丈、伴蒿蹊、上田秋成、清水濱臣、本居春庭、藤井高尙、伴信友、小山田與清、橋守部等は、當期、屈指の國文學者にして、各、名著を遺せり。

第三類 戲曲及び小説

近松門左衛門。

戲曲の大成。

戲曲は、巧に發理と人情との衝突を脚色し、變化自在の妙あり。

忠臣蔵は、英文、佛文、獨文に翻譯せられたり。

國性爺合戦のこの一節は、明人鄭芝龍といひしもの、妻を失ひ二歳の女子を遺して、我が國に來り、妻を娶りて、和唐内といふ男子を擧げし

一、戲曲 戲曲は、謠曲等より出て、前期末葉より拙劣のものありしが、元祿時代に、近松門左衛門出て大成せり。門左衛門は、巢林子と號し、初、京都に住み、後には大阪に移り、竹本義大夫の爲に、時代物、世話物等の戲曲を作り、才藻湧くが如く、善く人情の機微を穿ち、社會の状態を描きて、江湖の喝采を博しぬ。國性爺合戦、曾我會稽山等は、その上乘なり。又竹田出雲は、門左衛門に學び、その作れる所の假名手本忠臣蔵、菅原傳授手習鑑等、今尙世に行はる。

獅子が城對面の一節(國性爺合戦)

近松門左衛門

甘輝飛びしさつて、オ、御不審御尤、全く某無法にあらず、狂氣にも候はず。昨日、韃祖王より某を召し、この頃日本より和唐内といふえせもの、小僕下劣の身を以て、智謀、軍術逞しく、韃祖王を傾け、大明の世に繡さむと、この土

が、和唐内成長して、大明國の、韃靼王に滅されしと聞き、父母と典に於て、父と母と、まづ異腹の姉錦祥女が、吳將軍甘輝の妻たるを幸とし、その居獅子が城に至り、面會して事な謀り、舊國を復せむとせし事を記したるなり。

に渡る。彼が討手誰ならむと、數千人の諸侯の中より、その甘輝を選り出され、散騎將軍の官に任じ、十萬騎の大將を賜る。和唐内を、我が妻の兄弟と、今聞くまでは、夢にも知らず、彼奴、日本に傳へ聞く、楠とやらんが肝膽を出し、朝比奈、辨慶とやらんが勇力ありとも、我亦孔明が膽に分け入り、樊噲、項羽が骨髓を借つて、一戰に追つて追ひ捲り、和唐内が月代首提げて來らむと、高言吐きし某が、一太刀も合せず、矢の一本も放たず、ぬくぬくと味方せば、吳將軍甘輝が、日本の武勇に聞きおぢする者てなし、女にほだされ、縁に引かれ、腰が抜けて、弓矢の義を忘れしと、韃靼人の雜口にかけられむは、必定然れば、子孫末孫の恥辱免れ難し、恩愛不便の妻を害し、女の縁にひかれざる、義信の二字を額にあて、さつぱりと味方せむため、ヤイ錦祥女、留むる母の詞には、慈悲心こもる、殺す夫の劍の先には、忠孝こもる、親の慈悲と忠孝とに、命を捨てよ女房と、理非を飾らぬ勇士の詞、オ、聞き分けた、身に叶うた忠孝、親に貫うたこのからだ、孝行のため捨つるは、惜しいとも思はぬ、と、母を押しつけ、つと寄る。

二、小説は、寛文の頃までは、幼稚なる假名草紙あるに

井原西鶴。

瀧澤馬琴。
別號を曲亭ともいへり。

小説家の巨擘。
八犬傳百五卷、弓張月三十卷あり。

八犬傳のこの一節は、里見義實その父季基と典に、下總國、結城の城に籠りし時、或日敵と闘ひて、討死せむとせしが、父これを呼び留め、その迷誤を諒め、速に脱し時を待ちて、家を興すべき

過ぎざりしが、元祿時代となり、井原西鶴出でて、面目を一新し、謂はゆる浮世草紙を作れり。その文章輕妙にして、善く世態、人情を描き出せり。文化、文政の頃となりては、瀧澤馬琴起りて、大に小説の品位を高めたり。馬琴は、學問該博、才藻富瞻、その作、儒教の道德を標準として、勸善懲惡を主義とし、行文絢爛にして、人口に膾炙せるもの多く、近世小説家の巨擘と稱せらる。南總里見八犬傳、椿説弓張月等は、その傑作なり。

勇將忠士、落行の一節(南總里見八犬傳)

瀧澤馬琴

さる程に、里見冠者義實は、杉倉堀内に導かれて、十町餘落ち延びつ。さるにても、父君はいかになりはて給ひけむ、おぼつかなしといくそたび、馬の足搔を駐めつ、見かへる方は、関の聲、矢叫の音、驚しく、はや落城とおぼしく、て、猛火の光天を焦せば、あなやとばかり叫びあへず、そがま、鞆ひさしほりて、騎りかへさむとしたりしかば、兩人の老黨、左右より鑢にすがりて動

命じたり。磯實父の死すべきを知りて、捨つるに忍びざれども、その命にも背き難く、體代の老蘇、杉倉氏元、堀内貞行に導かれ、泣く／＼安房の方へ、落ち延びむとせし所なり。

元祿年間、戸田茂睡は、師範家の積弊を論じて、歌道の改革を唱へたり。

かさず。こは物體なし、今更に物にや狂ひ給ふらむ。大殿の教訓を何とか聞し召したるぞ。今落さるゝ城に還りて、可惜御身を喪ひ給はゞ、古歌にも詠める。夏蟲の火蟲よりも、なほ果敢なき所以なり。それ大信は信ならず、大孝は孝なき如しと、古人の金言、日頃より口ずさみ給ふには似げなし。凡貴きも賤しきも、忠孝の道は一筋なるに、迷ひ給ふはいかにぞや。こなたへ來ませと、牽く駒の心も狂ふ孝子の哀傷、頻にいらだつ聲もはげしく、放せ貞行止むるな氏元爾達なつたが諫言は、親の御こゝろなるべけれど、今これをしも忍びなば、われ人の子といはれむや。

第二節 韻文

第一類 和歌

古調、新調の和歌 元祿以後、國文學復興の後、春滿、眞淵等の作歌を始として、萬葉調、古今調等の長歌及び短歌出てしが、文政の頃に至り、景樹派の新調起りて、歌壇を一新せり。

復古派の和歌。縣居家集一巻、鈴屋集五巻あり。

一、古調の和歌 眞淵は、雄壯剛健なる萬葉風の歌を鼓吹して、縣居家集あり。宣長は、新古今調を標準として、鈴屋集を存す。又千蔭にうけらが花、春海に琴後集あり、共に古今集の歌風を主義とせり。

夏の日、高き屋に登りてよめる長歌並に短歌 賀茂 眞淵

老が身は、人こそいとへ、ふる人は、世にこそすつれ、わたつみや、厭はざるらむ、山つみは、すてや給はぬ、見渡せば、波をさよらせ、紐とけば、風を通はし、世の人の、厭ふてふなる、夏の日、照る日もしらず、高き屋に、つどひて歌ふ、ふる人の友。

浦びとの、鯛つりかへる、五手舟は、やく涼しき、夏にもあるかな。

我が畫像の繪によみて 本居 宣長

しきしまの、やまとごころを、人とはゞ、朝日ににほふ、山ざくら花。

田家烟 加藤 千蔭

筑波嶺の、しげさめぐみは、しるさかな、裾わの田居に、立つ烟にも。

富士山

心あてに見し白雲は、ふもとにて、おもはぬ空に、晴るゝ富士の嶺。

村田春海

桂園派の和歌。

景樹は、因幡の人にて、京都に住み、文政、天保の頃、名を歌壇に馳せ、家集、桂園一枝は二巻あり。

歌壇の革新。

二、新調の和歌 香川景樹は、桂園と號し、小澤蘆庵の主義に近く、復古派の古語、古格を弄ぶに反し、真情の儘を平易の語にて表すを主とし、殊に語調を重んじ、清新、流麗、自在にして、歌壇を革新せり。家集に桂園一枝あり。熊谷直好、八田知紀等の歌人も、その門より出て、現今この流派を汲むもの多し。

冬たちて風の荒ましく吹くに

小澤 蘆庵

松にふく、風もあらしに、なりにけり、北窗ふたげ、ふゆごもりせむ。

若 菜

香川 景樹

年どしに、若菜といひて、つみしかど、つもればこれも、老の數なり。

吉野にてよめる

八田 知紀

吉野山、かすみのゆくは、知らねども、見ゆるかぎりは、櫻なりけり。

第二類 俳諧

古風。

檀林風。

松尾芭蕉。

正風體。

一、俳諧の隆起 慶安の頃、松永貞徳、俳諧の式を定め、これを連歌より獨立せしめてより、連歌廢れて俳諧隆盛を極めたり。その一派を古風と稱す。尋いで西山宗因、大阪に出て、放肆なる一體を創め、檀林風と稱し、一時、俳壇を風動せり。
二、蕉門の俳諧 檀林風の俳諧、全盛を極むると共に、一種の弊風を生じ、諧謔を競ひ、俗調に流れしが、貞享の頃に至り、松尾芭蕉、一機軸を出して、その面目を改めたり。芭蕉は、伊賀の人、又桃青と號し、季吟に學び、後、江戸に出て、閑寂、幽玄を主義とせる正風體を起しぬ。その體、超然脱俗、法式に泥まず、滑稽に流れず、奇想を吐き、深遠の趣を詠じ、諸國を周遊して、その俳風を擴めしかば、四方翕然として、これに風靡せり。榎本

榎本其角、服部嵐雪、森川許六、向井去來、立花北枝、河合曾良、志田野坡、内藤文章、各務支考、越智越人は、蕉門の十哲と稱せらる。

其角、服部嵐雪等を始として、門人、諸國に多かりき。此等の高弟も、後には各自對立して一家を成せり。

古池や、かはづ飛びこむ、水の音

松尾芭蕉

枯枝に、鳥の止りけり、秋のくれ

同人

名月や、たゞみの上に、松のかけ

榎本其角

元日や、晴れて雀のものがたり

服部嵐雪

革新派。

谷口蕪村。

三、俳諧の革新 谷口蕪村は、攝津の人、京都に住し、其角の末流を汲み、安永、天明の頃、卑俗なりし當時の俳風を改め、漢詩の趣をも交へて、一種清新の調を始め、芭蕉と並べ稱せらる。大島蓼太は、當時、江戸にありて、亦有名の俳人なり。加賀千代女の句、亦よく人口に膾炙せり。

さみだれや、大河を前に、家二軒

谷口蕪村

春水や、四條五條の、橋の下

同人

蕪村の「春水や」の句は、唐詩選の「天津橋下陽春水、天

津橋上繁華子。」の詩句に基きしが如し。

俳文。

也有は、尾張侯の重臣、その著、鴉衣四巻あり。これより前に、森川許六が、俳人二十八家の俳文を集めたる風俗文選十巻ありき。

五月雨や、或夜ひそかに、松の月。朝顔に、釣瓶とられて、もらひ水。

大島蓼太
加賀千代女

又この頃、俳人に横井也有あり、殊に俳文を善くし、その文、淡雅輕妙の趣あり。蓋し俳文は、芭蕉これを始め、也有に至り大成せしものにして、その著、鴉衣世に名あり。

袋の讚(鴉衣)

横井也有

器は、入るものをして、ものが方圓に従はしめむとし、袋は、入るものに従ひて、ものが方圓を必とせず。實なるときは、肩にあまり、虚なるときは、懐にかくる。虚實の自在を知る布の一袋、壺中の天地を笑ふべし。

月花の袋や形は、さだまらず。

又、川柳といへる一體あり、諷刺を旨とし、柄井川柳に始れり。俳諧は、その後も世に行はれしが、漸次、俗了し去りぬ。

第三類 狂歌

川柳。

川柳は、天明、寛政の頃より盛に行はれたり。柄井川柳は江戸の人なり。

狂文
四方赤良、本名を太田翠といひ、又南畝の號あり。宿屋飯盛、本名を石川雅望といひ、六樹園の號あり。風來山人は、本名を平賀源内といへり。

定家の「駒とめて」の歌参照すべし。

狂歌の流行 狂歌は、和歌の變體にして、滑稽を主とせしものなり。當期、文化、文政の頃となり、狂歌師、一時に江戸に輩出し、中にも四方赤良、宿屋飯盛、最も滑稽の機智に富み、名聲頗る高かりき。赤良は、又蜀山人と號し、狂文をも善くして、風來山人の作と共に、普く世に知らる。

郭公に有明の月かきたる繪に

四方 赤良

ほととぎす、啼きつる方に、あされたる、後徳大寺の、ありあけの顔。

冬の歌の中

同人

駒とめて、そてうちはらふ、世話もなし、坊主合羽の、雪のゆふぐれ。

或人によみて遣しける

宿屋 飯盛

歌よみは、下手こそよけれ、天地の、動き出しては、たまるものは。

第三節 漢文學及び佛教

一、漢文學の勃興及び活用 當期、文學復興の魁たりしは、漢

程朱學派。

陽明學派。

古學派。

折衷學派。

異學の禁令。

水戸學派。

漢文體の變遷。

文學にして、將軍先づこれを重んじ、諸侯も競ひて儒者を聘し、經書を講じ、學者彬々として、一時に輩出せり。藤原惺齋は、程朱の學説を主唱し、林羅山これを受けて、子孫、世々幕府の儒官となり、木下順庵、山崎闇齋等亦これに應じ、一世を傾倒せり。中江藤樹は、陽明學を奉じて、實踐躬行を主とし、熊澤蕃山、佐藤一齋等これに和し、伊藤仁齋、同東涯、荻生徂徠、太宰春臺等は、古學を起し、片山兼山、井上金峨、山本北山、太田錦城等は、折衷學を唱へ、各派互に論難しければ、幕府、松平樂翁等の議により、遂に異學の禁令を發しぬ。降りて、會澤正志、藤田東湖等は、盛に國體名分の重んずべきを主張し、二宮尊徳、佐久間象山等の如きも、末葉に出てたり。而して、我が國の漢文は、從來、六朝の文辭を尙びしを、羅山の頃より、韓柳歐蘇の遺流

武士道の完成。

大日本史二百四十六卷、光圀、學者を集めて編し、史記に倣ひ、本紀列傳あり。

光圀の識見。

日本外史二十二卷、行文遒麗、廣く愛讀せらる。又山陽の著に、日本政記十六卷あり。

を汲み、徂徠は、古文辭を修めて、餘弊を改めしが、柴野栗山、尾藤二洲、古賀精里、頼山陽等に至りて、文體大に整ひぬ。謂はゆる武士道も、本邦固有の精神と、儒教の意と、佛教の旨とによりて完成し、山鹿素行の士道説、見るべきものなり。左の著作の如きは、當時の人心を感化せしこと著しきものなり。

第一類 歴史

(一) 大日本史 徳川光圀の編述に係り、神武天皇より後小松天皇に至るまでの歴史を敘し、神功皇后を后妃傳に收め、大友皇子を帝紀に列し、南朝を正統と定めたるは、識見超卓別に一隻眼を具せりといふべし。

(二) 日本外史 頼山陽の著なり。筆を源平兩氏に起し、徳川氏に終ふ。大義名分の發する所、尊王愛國の由る所を明かに

山陽の鼓吹。

作詩家の輩出。

寛政より文化、文政の頃までは、江戸の繁盛期にして、泰平を謳歌せしが、京都は日に衰へて、皇室も頽る振はざりければ、山陽、星巖等の如き慷慨の志士を出し、所以なり。

武士道の補助。

して、一意、當時の人心を鼓吹せり。維新の大業に盡し、勤王の志士も大にこの書に奨勵せられし所あり。

第二類 漢詩

一、漢詩の盛況 菅茶山、頼山陽、廣瀬淡窗、梁川星巖等の作詩は、最も見るべきものとす。その他の作家も、踵を接して崛起し、慷慨悲憤、大に國民の志氣を振興せり。

宿生田

菅茶山

千歳、恩讎兩不存、風雲長爲用、忠魂、客窗一夜聽、松鎖、月暗、補公墓畔村。

歲暮

頼山陽

一出、鄉園、歲再除、慈親、消息定何如、京城、風雪無人伴、獨、剔、寒燈、夜讀書。

二、佛教の影響 佛教は、當期の初、家康、寺制を設け、寺領を附し、興隆を謀りしことあり。又時勢の要求に應じて、儒教と近接し、悟道の方面より、武士道の完成を助けしが、元祿以後、僧

佛教の沈滞。

侶漸く安逸に馴れ、布教を怠り、遂に儒教に壓せられたれば、文學も、佛教思想の影響を受くること少くなりぬ。

第三章 結論

復興の文學。
創作の文學。
儒教主義、國家主義の文學。

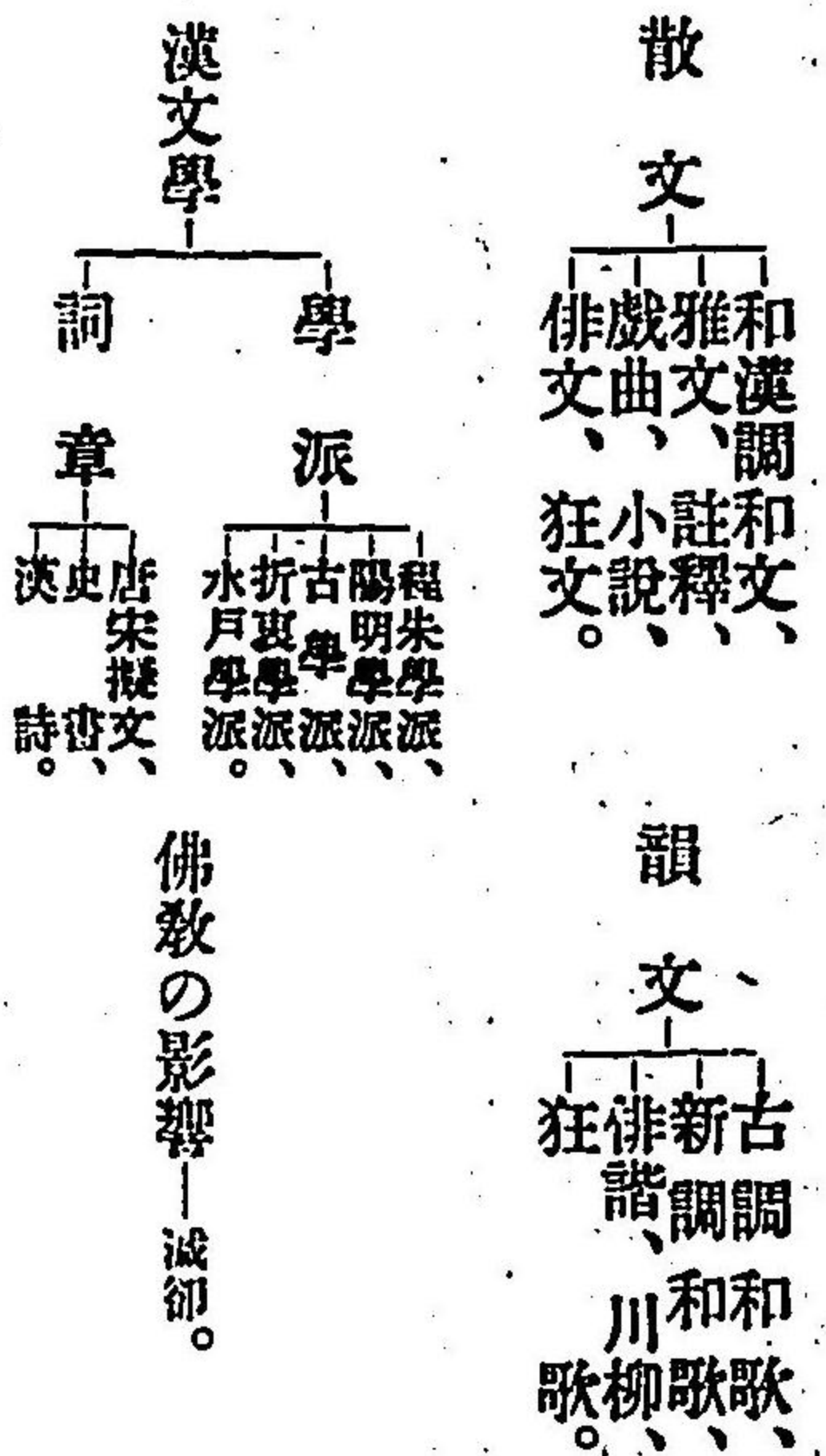
當期は、古文學の復興と共に、諸種の新文學を創作し、その復興せるものは、雅文並に長歌、短歌等にして、創作せるものは、戯曲及び小説等なり。これを室町時代の文學に比するに、幽鬱の思想去りて、儒教主義、國家主義となり、在來の國民思想に、鞏固なる道德的基礎を造るに至りぬ。而して、徳川氏前後三百年、泰平の基を築きしもの、主として儒教の賜なり。然るに、末葉倒れしものも、亦儒教と皇道の發揮とに外ならず。即ち徳川家は、儒教に成り、儒教及び國家主義に倒れたりとい

文學の勢力。

ふべし。これ蓋し文學者の唱道せし尊王愛國説の、政治上に發揮せしものなり。文學の勢力豈偉大ならずや。

概括

當期、幕府には、江戸に昌平學あり、甲府に敬典館、駿府に明倫館、長崎に明倫堂、佐渡に修教館等あり。諸侯亦盛に學舎を起し、末葉には百有餘の校舎あるに至れり。朝廷にては、仁明天皇の朝、學習院を置き給へり。庶民は、寺小屋の師匠に就きて、習字、讀書等を學べり。



紀元二五二八年、
王政維新の頃より、
今時に至るまでの
文學を現代の
文學となす。

第七期 現代の文學

第一章 通論

文學未曾有の
盛況。

新思想の討
究。

一、發達 前期末葉、文學者の主張せし尊王愛國の説は、茲に發揚して、明治維新の昭世となりぬ。大に知識を世界に求め、諸般の文物、制度等を改革し、封建時代の舊弊を一掃せり。随つて、階級制度を排し、一部の社會にのみ有せし文學も、一般國民の共通となり、實に前代未曾有の盛況となれり。

二、思想 維新の後、國民争ひて泰西の事物に倣ひ、盛に新思想の討究を競ひしかば、その思想の豊富となれること、前古に比なく、種々の學説を提唱するものあり。折しも教育に關する 刺語の煥發あり、一般人の思想、漸く著實となり、中正

國家主義の確
立。
思想の變遷
期。

なる國家主義の確立となりぬ。而して、維新後、明治十五年頃までを歐化時代とし、以後、明治二十五年頃までを覺醒時代とし、以後、現今までを東西兩洋思想の調和時代となす。

三、文字 漢字と假名とを混用する記載法は、公私の間に行はれ、漢字の使用すべきもの、殆ど一定したるものゝ如し。

四、作品 以上の思想文字の發露する所、諸種の作品となりて、一般人の間に行はる。左にこれを略述せむ。

第二章 各論

第一節 散文

一、翻譯文 維新後、平易暢達の翻譯文あり、西洋思想の傳播を勉め、或はその道德を紹介し、或は自由思想を鼓吹したる

ものなどありて、今期の初に行はれ、後には文體に一種の散漫なる弊を生ぜしが、爾來漸く我が國文と調和して、現今見るべきものあるに至れり。

二、普通文 今期、一般人の間に行はれたる文は、主として新聞、雜誌の體にして、初は太平記の行文の如く、或は漢文直譯の如く、或は英文直譯の如く、その文體種々なりしが、平易實用を尙ぶは、漸く一般の輿論となり、前期より行はれたる和漢調和文は、翻譯文、新聞、雜誌の文などと調和し、謂はゆる普通文となりて、思想發表の好機關と成りぬ。

三、口語體 口語と文章語との離隔せる不便と、速記術の進歩等とによりて、一種の口語の文體を見るに至りぬ。現今、普通文、口語體共に行はれて、使用に便なり。

新聞は元治元年岸田吟香等の刊行せしを初とす。今期には明治元年江湖新聞、同五年東京日日新聞の出たるをその初とす。雜誌は、明治六年明六雜誌の出たるを初とす。

口語體の記録は、明治二十四五年の頃より、漸次行はるに至れり。

國文學の盛運。

長くも 陛下は、明治七年より毎年一月、庶民の和歌詠進を許し給へり。

新體詩は、明治十五年、外山、山井上、野村、矢田部、尙今等の主唱に起れり。

四、雅文等 歐化時代には、國文學甚だ衰へしが、覺醒時代に至り、大に興りて盛運に趨き、雅文散見して、註釋、文法その他斯道に於ける各方面の出版物、亦枚舉に遑あらず。

五、小説及び戲曲文 西洋思想は、小説及び戲曲にも調和せられ、創作又は翻譯、翻案に係るもの多し。

第二節 韻文

一、和歌 畏くも 兩陛下は、殊に和歌を嗜み給ひ、御歌所を置かせられ、庶民の詠進をも嘉納し給へば、歌道獎勵の一端緒をなし、以て今日に至れり。

二、新體詩 當期、歌壇の革新として、七五調その他一種の歌體を創製したるは、新體詩なり。その體、應用自在にして、現代の思想を表すに適す。蓋し韻文一面の進歩といふべし。

俳諧は、明治二十五年頃より、蕪村の俳風を基へる正岡子規等の手によりに革新せられたり。

道徳上の價值。

漢文學の厄運。研究の工夫。

三、俳諧 一時、俗調の俳諧行はれしが、爾後、革新せられ、思想、格調の歩を進めたるものあるが如し。

第三節 漢文學

漢文學の概況 歐化時代には、漢文學を修むるもの、殆ど地を掃ふばかりなりしが、爾來或は起り或は衰へ、近時その道徳上に資すべき功益を認めて、復、研究に志すもの多し。されども、比年、老儒碩學、相尋ぎて凋謝するは、文運の厄といはざるべからず。されば、方今、漢文學研究に關し、更に一工夫を要すべき時機にありといふべし。

第三章 結論

今期の文學は、思想界の調和を東西兩洋に取りたれば、忽ち

國文學研究の進歩。

文學の普及。

國文學に對する抱負。

帝國國民の大責任。

に豊富となり、大小の學校、新文明の普及に勉めたる結果として、國文學に關する研究も次第に進み、新古諸方面の書籍も陸續發刊せられ、文壇日に月に隆盛に趨き、文學の一般人の間に普及せること、前代未だ曾てなき所なり。而して、近年、國威俄に勃興して、世界列國に雄視し、歐米人の我が國の文物、制度等を知らむとするものも年一年に多し。されば、今後、奮勵努力して、國文學の進歩を謀り、その特性を世界文學史上に發揚せむことは、吾人の任務なりとす。故に、我等の祖先が、開闢以來傳へ遺せる文學の歴史と、思想の由來とを討究して、東西兩洋の思想及び文學を調和大成し、國運の伸張と共に、我が國文學及び國民精神の特質を發揮せむこと、これ豈帝國國民たるもの、一大責任にあらずや。

今期、屢々學制の改革を経て、現今は、小學校、高等女學校、中學校、高等師範學校、高等學校、高等師範學校、帝國大學、その他專門學校、私立學校等の設ありて、教育の進歩、前古に比なし。

概括
散文—翻譯文、普通文、口語體、雅文、韻文—短歌、新體詩、俳諧。
小説戲曲文。
漢文學—復興。

日本文學史要終

附錄 年表

時代	天皇	年號	紀元	要項	時代	天皇	年號	紀元	要項
上古	神武		一	大和の橿原の宮に即位す	平安朝	桓武	延暦三	一四五四	都を平安京に奠む
同	應神		九四五	王仁來朝し論語千字文を獻す	同	平城	大同元	一四六六	僧空海眞言宗を傳ふ
同	欽明		一二二	百濟王より佛像經論等を獻す	同	醍醐	延喜五	一五六五	古今和歌集成る
同	推古	古	一二六四	聖德太子憲法を撰ぶ	鎌倉時代	後鳥羽	文治元	一八四五	源賴朝守護地頭を置
同	孝徳	徳	一三〇五	大化の新政を布く	同	土御門	建仁二	一八六二	源賴朝幕府を鎌倉に開く
同	天武	武	一三四二	境部連石積新字を撰ぶ	同	建久三	建久三	一八五二	僧榮西禪宗を弘む
同	文徳	武	一三六二	大養の新政を頒つ	同	元久二	元久二	一八六五	新古今和歌集成る
同	元明	明	一三七〇	都を平城(奈良)に奠む	南北朝	後醍醐	延元元	一九九六	南北の兩朝分立す
同	同	同	一三七二	太安磨古事記を上る	室町時代	後小松	明德三	二〇五二	南北の兩朝合一す
同	同	同	一三八〇	舎人親王日本書紀を上る	同	同	應永八	二〇六一	足利義滿好を明國に遣す
平安朝	桓武	正	一四四一	光仁天皇讓位、桓武天皇即位す	江戸時代	後陽成	慶長八	二二六三	徳川家康幕府を江戸に開く
同	同	天應元	一四四四	都を山城長岡に遷す	同	後水尾	元和五	二二七九	程朱學派の藤原惺窩歿す

年表

時代	天皇	年號	紀元	要項
江戸時代	明正	寛永七	二二九〇	林道春忍ク岡に學寮を建つ
同	東山	元祿三	二三五〇	徳川綱吉聖堂を湯島に建つ
同	同	同七	二三五四	松尾芭蕉歿す
同	同	同一三	二三六〇	徳川光圀歿す
同	同	同四	二三六一	僧契沖歿す
同	同	寶永二	二二六五	古學派の伊藤仁齋歿す
同	中御門	正徳四	二三七四	貝原益軒歿す
同	同	享保九	二三八四	近松門左衛門歿す
同	同	同〇	二三八五	新井白石歿す
同	櫻町	元文元	二三九六	荷田春滿歿す
同	後櫻町	明和六	二四二九	賀茂眞淵歿す
同	光格	天明三	二四四三	横井也右、谷口蕪村歿す
同	同	寛政二	二四五〇	幕府異學の禁令を布く
同	同	享和元	二四六一	本居宣長歿す
江戸時代	仁孝	天保三	二四九二	頼山陽歿す
同	同	同四	二五〇三	香川景樹、平田篤胤歿す
同	孝明	嘉永元	二五〇八	澁澤馬琴歿す
同	同上	慶應三	二五二七	徳川氏大政を存還す
同	同	明治元	二五二八	御誓文を賜り新政を布かせらる
同	同	同二	二五二九	新聞紙の發行を許さる
同	同	同五	二五三二	學制を頒布せらる
同	同	同二	二五四九	憲法を發布せらる
同	同	同三	二五五〇	教育勅語を下賜せらる
同	同	同七	二五五四	日清の戦役起る
同	同	同三七	二五六四	日露の戦役起る
同	同	同四一	二五六八	戊申詔書を下賜せらる

明治四十三年五月十一日印刷
 明治四十三年五月十四日發行

日本文學史要
 定價金參拾八錢

著作者 佐藤正範

發行者 上原才一

發行所 光風館書店

印刷者 矢島一三



東京市神田區裏神保町六番地
 東京市神田區裏神保町六番地
 電話本局二千三十九番
 (接替口座東京三三七番)

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候に付萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候は、直ちに御送附可致候

246
 188

